

朝鮮民主主義人民共和国

朝鮮民主主義人民共和国

面積 12万0538 km²

人口 約1615万人 (1976年1月推定)

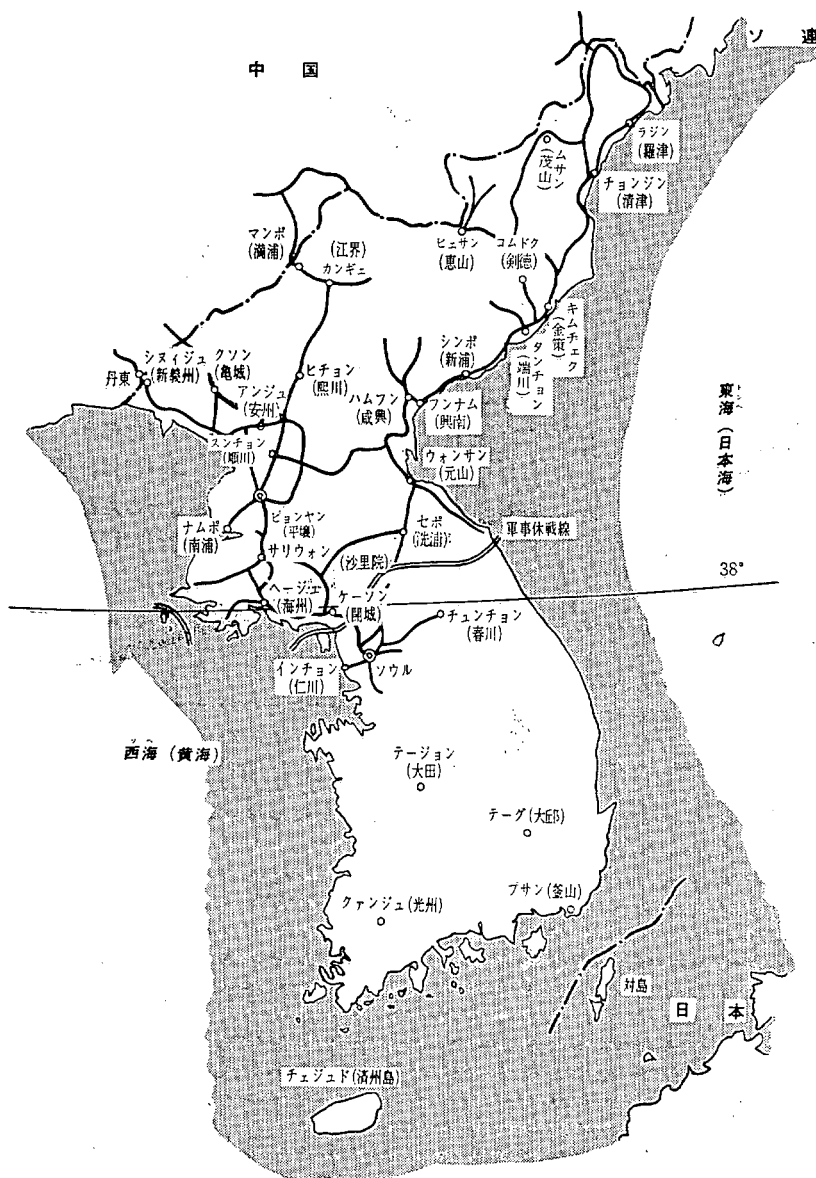
首都 ピョンヤン (平壤)

言語 朝鮮語

政体 社会主義共和制

元首 金日成 (共和国) 主席

通貨 ウォン (1米ドル=1.94ウォン, 1976年末現在)



1976年の北朝鮮

——内攻する危機と外交面の激動——

概観——低迷と危機の年

朝鮮民主主義人民共和国は、1976年に外部にもそれと知られる低迷と危機の様相を呈した。その要因は、すでに昨年年報で明らかにしたように、75年秋から発生していた。一言にしていえば、75年8月末をもって達成したという6カ年計画くり上げ完遂のための強行措置が、その直後から、経済的にも、政治的にも、多くの矛盾を激化させていた。76年には、その諸矛盾が、いっせいに表面化したものといつてよい。



非同盟諸国首脳会議に出席する朴成哲首相

その矛盾は、経済的、政治的、国内的、国際的なすべての面であらわれ、しかもそれらが結びついていっせいに噴出しているだけに、きわめて重大化している。また、それが、いまだかつてない金日成主席個人の絶対的独裁化・神格化という状況のもとで起こっているために、きわめて深刻化している。

他面で、中国における毛沢東死去以後の政変や、アメリカにおけるカーターの進出と大統領当選などの国際的変化が、人民共和国の針路に複雑な影を投げかけている。それらがプラスに作用す

るか、マイナスに作用するかは、現在の段階では予断を許さないが、現状からすれば、人民共和国には、事態の推移を見まもって、諸条件を有利に転化するだけの時間的余裕さえないように見受けられる。

また本年は、72年社会主義憲法の規定からすれば、共和国主席や中央人民委員の再選期にあたり、また党大会をひらいて77年からの新計画を採択決定すべき年であったにもかかわらず、そのいづれも実施されなかった。その意味では、みずから定めたルールからも逸脱せざるをえなかった異常な年であったといえよう。

その国際的地位も、前年までのめざましい上昇気運と打って変わって、本年は衰退に向かった。その底流には多額の外債支払遅延現象がある。それは、はじめ主として資本主義諸国経済界の憂慮にとどまっていたのであるが、やがて政治的な不評にもつながり、ついには非同盟諸国、社会主義諸国における不信感をさえ醸成するにいたった。とりわけ8月の非同盟諸国首脳会議と板門店事件以後には、その国際的不信感が表面化し、人民共和国の外交も、沈滞の極に陥った。

このような国際的不振は、はねかえってそのまま国内にも反映せざるをえない。その意味で、内外の矛盾が、からみ合って、集中的に人民共和国の途上に登場した。この難局は当然容易に克服できそうにもない。

国内政治

年頭から、人民共和国内には、ただならない何事かを想像させる状況が生じていた。その第1は、前年12月25日にサントメ・プリンシペ大統領ダ・コスタ夫妻を出迎えて以来、金日成主席は公式の席上に姿を現わさなくなり、ようやく2月7日夕の朝鮮人民軍創建平壤市学生少年慶祝公演

に、はじめて44日ぶりに登場したことである。

その間1月1日には、恒例の「新年の辞」が発表されたが、その全文は前年の3分の1に近い簡単なものであり、内容は6カ年計画「未完充高地」である鉄鋼・セメントを中心に、全経済部門で「生産を正常化」することを訴えたものであった。その国際的課題の部分においても「世界の進歩的人民との団結を強化し、親善協力関係を発展させるためにねばり強く努力」することを訴えていて、例年にくらべて、いちじるしく力が弱い。これは金主席が、内外情勢に関して、一種の自信喪失現象に陥っていたことを示すものであろう。

この金日成再登場後、秋までに中央幹部級の人事に一連の異動が生じた。このうちには死亡者もふくまれているが、列举すると次の通りである。

- 3月7日 南日副総理不慮の事故死
- 4月29日 金一総理辞任(第1副主席に就任)、後任総理に朴成哲副総理を任命
- 5月14日 崔賢人民武力部長解任(国防委員会副委員長に就任)、後任人民武力部長に呉振宇人民軍総参謀長を任命
- 5月16日 洪元吉副総理急死
- 9月19日 崔庸健副主席死去

このうち南日副総理は64歳、洪元吉副総理は52歳、崔庸健副主席は75歳で死んでいる。ソ連派生き残りの最後の大立物であった南日、重工業を中心とする経済建設の実力者であった洪元吉の急死は、きわめて不自然である。また、満州(現中国東北地方)の抗日武装闘争以来の古参幹部であり、金日成と比肩しうる名声の持主であり、しかも1970年の党第5回大会選出幹部中で、金日成体制を支える最高トリオであった崔庸健、崔賢、金一の3人が、ことごとく中枢から消去されたことは、一種の政権交替に近い意味をもつものである。これに代わって、新しい最高トリオになったものは、前年に副主席に就任した金東奎と、朴成哲新首相、呉振宇新人民武力部長(人民軍総参謀長兼務とみられる)の3人であろう。

このほかに、5月4日の祖国光復会創建40周年記念報告会に、林春秋が党中央委員会政治委員会委員という肩書きで初登場している。林は、これまで2回にわたり党を追放されたともいわれる不審な経歴の幹部であるが、72年の社会主義憲法制

定時に中央人民委員会書記長の座に就いてから、急速に栄進し、ここで党中枢部に参与するようになった。

また徐哲、李根模、延享默、楊亨燮らが安定的に地位を確保し、若年クラスの全文燮、呉白竜、金英南、鄭準基、姜成山、金鉄万、孔鎮泰、金煥らの台頭がみられる。これに反して、ほぼ失脚したと見られるのが、金英柱、金仲麟(9月20日の崔庸健葬儀委でようやく30位に復活)、柳章植、朴洙東ら、かつて南北調節委にかかわった顔ぶれである。許淡、崔載羽、尹基福らかつて行政面の中堅幹部と見られた人びとの地位は、若手の台頭にともなって相対的に低下をきたしている。

12月13日に、突然、李鍾玉、桂応泰の2人が政務院副総理に任命された。このうち李は、比較的古参であり、重化学工業関係の職務を歴任してきたベテラン幹部である。70年前後に一時失脚したが、72年から再浮上した。桂応泰は67年以来貿易相・貿易部長をつとめて来た中堅の貿易関係テクノクラートである。政務院副総理はこれで崔載羽、許淡、李根模、鄭準基、洪成南、金英柱、孔鎮泰の7人に加えて9人となった。

こうして、この年を通じて形成されてきた新金日成政権は、古参幹部を名誉職的な地位にタナ上げし、中堅幹部を忠誠基準によってふるいわけ、若手幹部を大幅に抜擢しつつあるといえてよい。その中で、中堅幹部と若手幹部の競合現象も生まれてきている。

また、ここ1～2年、国外から注目されている金正一の後継者化問題も、この新政権の台風の眼になっていると見られる。金正一が、1973年9月の労働党中央委第5期第7回総会で党中央委秘書局長の地位についたこと、6カ年計画くり上げ達成運動でイニシアチブをとった「三大革命小組」の統括者であるらしいことなどが、ほぼ確認されている。またその後継者化運動が実際に展開されていることも、各地での写真掲揚や、敬称の固定化や、生母金貞淑の顕彰や、在日朝総連組織への教育文書伝達等を通じ、ほぼ確実視されている。本年中には、その後継者指名というような事態は起こらなかったが、いくつか重要な現象があった。

まず金正一の誕生日として知られている2月16

日を期して、第1回全国青少年学生の忠誠の祝典、朝鮮少年団平壤市連合団体大会、体育人の忠誠の模範競技などの催しが盛大に挙行された。しかし春ごろに、一部で金正一の写真が撤去されはじめたとの見聞情報が伝えられたこともある。また、秋には韓国への帰順者情報として、金正一が対南工作責任者の地位についているという報がもたらされた。これらを総合すると、金正一の処遇をめぐる、一定の動揺が生じているように見える。このことは、6カ年計画くり上げ完遂のイニシアチブをとった「三大革命小組」数万名の再評価、再配置をめぐる、まだ方針が定まらぬことを意味するのかも知れない。

本年の政治過程で、もうひとつ注目されることは、金主席の精力的な現地指導である。公式に報道された限りでも、次の8回があげられる。

2月27日、3月1日——平安南道安州地区（都市建設事業、農村事業）

3月中旬～4月3日——咸鏡北道清津地区（金策連合企業所、清津化学繊維工場、清津西港・東港、清津造船所など道内重要工場・企業所・文化施設。4月3～5日に労働党咸鏡北道委員会総会拡大会議を召集指導）

9月15～20日——平安南道（協同農場、工場・企業所、道内農業部門活動家の協議会を召集指導）

9月25～27日——黄海南道（果樹総合農場、協同農場、中央地方果樹部門活動家協議会を召集指導）

9月24、27～28日——黄海北道（協同農場、工場、道内農業部門活動者会議を召集指導）

10月25日～11月6日——江原道（各協同農場、元山水産事業所、元山船舶修理工場、元山穀物加工工場、主要都市建設対象。道内水産部門活動者協議会、穀物加工工場幹部協議会、農業・水産部門活動者協議会、党活動家との協議会などを召集指導）

11月6～19日——咸鏡南道（各水産事業所、協同農場・新浦造船所、竜城機械工場、咸興毛織物工場。14～15日に東海地区水産部門熱誠者会議を指導）

11月28日——金日成総合大学

これは、両江道、慈江道、平安北道をのぞく全地域に及ぶものであり、特に咸鏡北道、咸鏡南

道、江原道という東海岸3道に対しては、日数をたっぷりかけて念入りに現地指導をしている。このような現象は、ここ数年にみられない活発な動きである。恐らく6カ年計画完遂をめぐる経済・政治上の混乱をのり切るために、金主席がみずから現地を訪れるとともに、その活動ぶりを大きく報道して、金主席の健在を国民に印象づける必要が生じたのであろう。

本年開催された最高人民会議は、4月27～29日の第5期第6回会議であった。この会議は、

1. 1975年度国家予算執行に関する決算と1976年度国家予算について（金敬連財政部長報告）
2. わが国における先進的な幼児保育教育制度をいっそう強化発展させることについて（鄭準基副総理報告）
3. 組織問題

の3議案を審議し、第2議案については、「幼児保育教育法」が採択され、第3議案では、金一総理の第一副主席への転補と朴成哲の総理就任が決定された。

また党中央委総会は、上半期にはひらかれずじまいとなり、ようやく10月11～14日にいたり、前回から約1年ぶり第5期12回総会がひらかれた。この会議は、

1. 1976年度宮農事業の総括について（各道党委員会責任秘書報告）
2. わが党が提示した自然改造5大方針を徹底的に貫徹して穀物1000万トン生産高地をくり上げ占領することについて（徐寛熙農業委員会委員長報告）

といういずれも農業問題にしばった2議題について審議した。つまり、本年達成されるべき課題とされていた鉄鋼、セメントの2大未完充高地占領を中心とする工業部門の総括は、何らなされずに終り、また6カ年計画くり上げ達成後の最重要課題であるべきはずの、次期経済計画についても、全く審議されないでしまったのである。それはこの年の工業建設の課題をついに達成しえなかったことを反映するものと見られる。ただし、のちの金主席の1977年「新年の辞」に、党中央委員会が、77年度を「緩衝の年」と定めたことが言及されているところを見ると、この会議はその決定を前提として、農業問題に議題をしばったのかも知

れない。

また、前記のように本年は憲法規定からすれば、主席、中央人民委員会の任期（4年）満了期にあたり、本来なら12月中に最高人民会議をひらいて、改選しなければならないはずであったが、全く不問に付されたままに終わった。72年新憲法は、その初頭から為政者によって履行されないという実績を残したわけである。

経済建設

（1）76年の課題

前年11月にひらかれた党中央委第5期第11回総会の決定により、この年は6カ年計画くり上げ完遂後の、未完遂部分を達成し、次の新たな建設のための準備事業を全面的に展開する年であるとされた。

1月1日の金主席「新年の辞」では、(1)未完遂高地である「鉄鋼業とセメント工業」に力を入れ勝利の旗をなびかせる、(2)採取工業をしっかりと先行させる、(3)機械工業部門で、大型機械、対象設備の生産能力を拡大し、新重機械工場の建設を促進する、(4)農業の発展にひきつづき力を入れる、(5)輸送革命を強力に押しすすめる、といった課題が列挙され、人民経済全部門で「生産を正常化」することが強調された。

ここでは要するに、6カ年計画でまだ達成されていない部分を達成するとともに、くり上げ達成により生じた経済混乱を、採取工業先行、輸送革命によって克服すべきことが、課題とされたのである。しかも、機械工業の生産能力拡充が提起されているのは、依然として、機械万能の設備拡張主義がとられていることを意味する。これはすでに、矛盾した、欲張りな課題設定といわなければならない。はたして、この年に生産は「正常化」されるどころか、いよいよ混乱を増した。そのために、77年「新年の辞」では、くりかえし、輸送の緊張を解決し、採取工業を先行させることを声を大にしていなければならないこととなるのである。

（2）財政報告

4月27日にひらかれた最高人民会議第5期第6

回会議初日会議で、金敬連財政部長は、例年の財政報告を行なった。

この報告で特徴的なことは、まず第1に、75年の工業生産が対前年比120%の成長をとげたとしていることである。これは前年9月22日に中央統計局が発表し、その後もくりかえし報告していた6カ年計画くり上げ達成数字が、8月末までに工業総生産額を対前年比125%に達成したという公表を、きわめて大幅に修正したものである。これはくり上げ完遂報告がいかにもズサンなものであったかを、言外に告白したものといっていよいが、この大幅修正に伴う他の成果数字の修正は、全くなされていない。

第2に、基本建設部門では、次の成果があったとされる（第1表）。

第1表 1975年の基本建設の成果

建設対象名	状 態
北倉火力発電所	完 工
西頭水発電所第2段階工事	成功裏に実施
清川江火力発電所	"
大同江発電所	"
金策製鉄連合企業所	
4号コークス炉	新 規 建 設
大庄延職場	積 極 的 進 行
青年化学工場	急速進行、遠からず操業
順川セメント工場	"
10,740余対象新設工事	完 成

ここでは、電力、鉄鋼、化学、セメントがクロウアップされている。これは成果というよりむしろ新年度の課題を強調したものといっていよいであろう。

第3に、例年発表される工業生産達成数字では、前年に目標として設定した化学繊維、塩化ビニール、工作機械、発電機、電動機に関する言及は全くなく、わずかに、機械製作工業1.5倍、貨車生産1.3倍という数字があげられているだけである。農業生産に関しては、比較的くわしく、次の数字が上げられている（第2表）。

第4に、1976年の生産（供給）目標量として具体的に数字があげられているのは、次の11品目である（第3表）。

この目標の立て方からわかるのは、輸送（貨物車）、採取工業（鉄鉱石、試験機、掘削機、採炭機）、

農業(肥料, 農薬, 除草剤)に最重点をおきながら, そのキメ手を依然として機械工業(貨物車, 空気圧縮機, 試錐機, 掘削機, 採炭機, 電動機, 発電機)にしているということである。ここには, 工業とその先行部門(輸送, 採取工業), 工業と農業との矛盾が明瞭にあらわれ始めているにもかかわらず, その矛盾を機械工業の発展によって, 克服することができるという考え方(思想)があらわれている。

第2表 1975年の農業関係達成成果

科 目	達 成 数 字
トラクター供給量	1.3 倍
自動車供給量	1.2 倍
田植え機供給量	15,000台
施 肥 量	町歩当り1トン以上
穀物生産量	770万トン以上 (対前年比70万トン以上増産)

第3表 1976年の生産(供給)目標

品 目	対前年比(倍)
鉄 鉱 石	1.2
貨 物 車	1.2
空 気 圧 縮 機	1.4
試 錐 機	1.4
掘 削 機	1.4
採 炭 機	2.0
電 動 機	1.8
発 電 機	1.4
化学肥料供給量	1.3
農 薬 "	1.4
除 草 剤 "	1.2

第5に, このような基本的骨組みの上に立てられた国家予算全体の財政規模を, 従来の予算とくらべてみると, 第4表のとおりになる。ここでは, 本年度予算額が, 例年の予算対前年比増加率にくらべても, 決算の対前年増加率にくらべても, きわ立って低く設定され, 金額にして125億1321万ウォン, 対前年比0.9%増となっていることに注目しなければなるまい。人民共和国の財政収入は, 100%社会主義経営収入に依存しているのであるから, このような予算設定の仕方は, そのまま本年度社会主義経営収入に対する消極的な予測を表現したものであるといつてよい。これは, 昨年度の工業総生産額成長率を, 当初の25%(しかも8月末までの数字)を20%(12月末まで)と大幅修正したことと, 密接に関連しているであろう。現実には, この20%という数字も, 信ずるに値しないものであったのかも知れないのである。あるいは, 前年にあまりに労働強化を強制したために, 勤労者の反発を恐れて, このようなモデル的な数字を設定し, 勤労者の休養を意図したのかも知れないが, それにしては, 本年も相変わらず「三大革命赤旗争奪運動」を中心とする労働力動員が, 年頭から激しくすすめられている。

第6に, 国家財政支出中の各部門への投資動向を見ると, 第5表の通りである。昨年の投資決算が農業部門を除いて, いずれも予算計画における伸び率を下まわっていることが問題である。住宅部門投資は一見計画伸び率を上まわっているように見えるが, ここには文化厚生施設投資がふくまれているのである。つまり, 記念碑的な革命史跡

第4表 財政規模の推移(1970~76年)

(単位 万ウォン)

年 次	予 算 額	対前年増加率 (%)	決 算 額			
			歳 入	対前年増加率 (%)	歳 出	対前年増加率 (%)
1970	618,662	11.6	623,200	17.2	600,269	18.9
(同換算値)			(534,200)		(508,070)	
1971	727,727	17.6	635,735	2.0	630,168	5.0
(同換算値)	(617,220)			(19.0)		(24.0)
1972	737,480	1.3	743,030	16.9	738,861	17.2
(同換算値)		(19.5)				
1973	854,351	15.8	859,931	15.7	831,391	12.5
1974	980,121	14.7	1,001,525	16.5	967,219	16.3
1975	1,151,720	17.5	1,158,630	15.7	1,136,748	17.5
1976	1,251,321	0.9				

第5表 国家財政支出と投資 (1974~76年) (対前年比 %)

費 目	1974年度予算	1975年度予算	同 決 算	1976年度予算
人民経済支出	—	119	118	110.4
基本建設投資	150	140	130	
運輸部門投資	—	180	150	
採取工業部門投資	160	160		120
金属工業部門投資	250	膨 大		
機械工業部門投資				200
化学工業部門投資	190	230		
軽工業部門投資	150	120		
農業部門投資	170	140	140	130(穀物関連)
社会文化施策費	116	118	115	112.1
教育部門支出	114	119	120(文化厚生 施設含む)	113
住宅部門支出	180	150		
保 育 費				107.2
保健施策費				112

第6表 国家財政中の国防費推移 (1972~76年)

年 次	予 算			決 算		
	財政中の割合 (%)	金 額 (万ウォン)	対前年増加率 (%)	財政中の割合 (%)	金 額 (万ウォン)	対前年増加率 (%)
1972	17.0	125,372		17.0	125,506	
1973	15.0	128,153	2.2	15.4	128,034	2.0
1974	16.0	156,819	22.4	16.1	155,722	21.6
1975	16.4	188,882	20.4	16.4	186,427	19.7
1976	16.5	206,468	9.3			

(出所) 各年「財政報告」

(備考) 金額は、公表された財政総額とパーセンテージから筆者が算出したもの。

(金主席の個人崇拜のための博物館、銅像等)や、国家的なプレステージを高揚するための宮殿、劇場、公園等々の建設費への投資が、ここに大きく含まれているものと見なければならぬ。さらに76年度予算においては、人民経済支出も、社会文化施策費も、前年の予算案における伸び率を下まわる伸び率しか設定されていない。このことは、財政全体における消極性をそのまま反映している。

なお本年までの国家財政中の国防費の推移を見ると、第6表のとおりである。72~73年にかけて増加率がいちじるしく低下しているのは、72年の7・4 共同声明による南北緊張緩和の影響であろう。だが74年から急速に増大しはじめ、年々20%近く増大している。本年度予算で、財政総額中の割合では前年より増大しながら、対前年増加率ではいちじるしくトーンダウンしているのは、恐らく経済的理由によるものと思われる。

その後、しばしば各産業分野別に生産革新や増産の報道がなされたが、それはほとんど部分的・個別的な成果の紹介であって、年間目標の達成や、建設対象完成の報告は見られなかった。9月17日に朝鮮中央通信が報じた建設関係の成果報道によっても、建設中のものとして、順川セメント工場、青年化学総合工場、清川江火力発電所、南清津(都市)があげられているだけである。

ようやく10月15日にいたり、穀物高地800万トンを成功裏に占領したことが大々的に報道された。

年末の12月18日にいたり、清川江火力発電所第1段階工事を完成し発電を開始したことが報道された(第1号発電機、出力5万kWh)。また12月31日には黄海南道の長淵線の広軌化工事が完工したと伝えられた。

また、本年度の最重要課題として設定されてい

た鉄鋼、セメントの2大高地占領については、ようやく12月31日に占領と報告された(それも生産能力のみ)。このような点から見ると、本年の経済建設は、全般的にいちじるしく不振のままに推移したと見てよいであろう。

この直接的な原因としては、外国に対する貿易代金の支払遅延の問題があげられる。この問題は75年前半から、関係諸国の問題となり、日本も同年半ごろから各種の代表を送って打開につとめて来た。本年3月13日に、共和国側から対日債務の2年間延期を申入れて来た。当時すでに支払期限のきている債務は約6000万ドル、債務総額は2億6000万ドルにのぼるとされていたので、日本側商社や日朝貿易会は困惑して条件交渉に入った。しかし延滞利子問題などをめぐって難航した。8月になると、フランス、西ドイツ、イギリスなどが、次々に輸出保険を適用して、事実上貿易を停止したことが明らかになった。この3国を中心とするヨーロッパ諸国は、1973年ころから共和国の積極的なプラント導入政策に応じて対朝鮮貿易を拡大して、その未払代金は10億ドル以上にのぼるものと推定されるが、その支払いの見込みがほとんどなくなったわけである。そこで、ヨーロッパ諸国はいっせいに対朝鮮輸出を手ひかえ始めた。そこへ、10月以降後段(対外関係の項)に見るような北欧諸国における共和国外交官の不祥事件が続発したため、共和国の評判は地に落ちる。

このような貿易の急激な不振に直面したため、建設途上のプラントの一部や、建設した工場に必要な原料・資材・部品等の入手が困難になって、共和国の経済建設は、非常な難局に直面したものである。

9月2日には、「労働新聞」が社説をかかげて「こんにち、わが党と革命は、すべての党員と勤労者がふるいたって最大限に増産し、われわれの前進運動を疾風のごとく促すことを切実に要求している」と訴え、全員が2人分、3人分ずつ働くことをよびかけた。この社説は、「命令を実行するまでは死ぬ権利もない」というような崇高な革命精神」によって、「驚くべき奇跡と革新が創造」されることを期待し、「さ細な不平や不満も徹底的になくし」て、「人民経済のすべての部門、すべての単位で最大限に増産し、節約して、社会主義

建設で新たな革命の高揚を起こす」よう勤労者に要求するという異様な切迫感におおわれている。

このために前年暮れから展開されている「三大革命赤旗争取運動」を徹底的に増産運動・節約運動と結合しておしすすめようとする努力が見られたのだが、その運動の展開実態に関する報道よりも、上からその意義を強調し訴えるという傾向がきわめて濃厚であった。そのことは、この運動が意外に大衆的に定着していないことを物語っているようである。

対外関係

本年の人民共和国の対外関係は波瀾に満ちたものとなった。

まず第一に、アメリカおよび韓国に対してきわめて激しい攻撃をしつづけた。とくにこの年前半、駐韓米軍の軍備増強を核攻撃力の強化とみて強く非難・糾弾し、米韓軍の軍事演習を軍事挑発として激しい非難をあげせた。さらに朴政権に対しては、植民地的軍事ファッショとし、「売国逆賊」と名づけて攻撃を加え、反朴民主回復運動に公然と支持声援を送った。ついには朴大統領に対するあらゆる個人攻撃を強化し、朴政権の打倒を呼号し、朴政権の退陣を要求するまでにエスカレートした。「北は地上楽園、南は生地獄」という線に沿って、韓国の社会的諸事件(労働争議、経済的矛盾、自殺、事故等)を間断なく報道しつづけた。

8月5日に、中東部戦線非武装地帯で、南北間に、機関銃、無反動砲による銃撃戦が起こるや、ただちに同日政府声明を発表して、事態は「米と南朝鮮当局者は、いまや戦争準備を完了し、直接、戦争の導火線に火をつけようとする冒険的な策動に移行している」、「帝国主義者が侵略戦争挑発前夜にのみ強行しうる行為」と断定し、世界各国に対して「もし米帝の戦争の脅威をいま阻止しないならば朝鮮半島での戦争勃発を防ぐことはできないし、朝鮮でいったん戦争が起これば、それはまたたくまに世界的な戦争に拡大するであろう」とアピールし、警告した。

このように異様な緊張にみちた姿勢は、8月18日の板門店事件への引き金となるものであった。これは板門店警備区域におけるポプラの枝切り払

いに端を発し、米韓側の伐採班を共和国側が実力阻止しようとし、米軍将校2名を斧で撲殺した事件である。このため北では人民軍最高司令官命令により全人民軍、労農赤衛隊、赤い青年近衛隊が戦闘態勢に入り、南では駐韓米軍が予備警戒態勢、韓国軍が戦闘待機命令に入るなど、一触即発ともいふべき軍事緊張が発生した。

しかし21日、米フォード大統領命令で、問題のポプラの木が伐り倒され、金主席は同日の軍事停戦委にメッセージを伝達した。このメッセージを米側は「遺憾の意」表明と受け取ったために、緊張は緩和に転じた。さらに共和国側の提議により、共同警備区域を廃止する交渉に移り、9月6日、同区域中間に軍事境界線標示の障壁を設ける協定が成立して結着がついた。この間、共和国側に対して、中ソから何らかの抑制的な意志表示があったとも伝えられている。

この板門店事件を契機に、共和国側の対外活動は一時急激に消極化し、沈滞に向かう。とくに重要な現象は、8月16日に国連総会に提出していた24カ国共同提案の北朝鮮支持決議案を、9月20日にいたり自主的に撤回したことである。さらに、9月22日から開催された国際原子力機構第20回総会、9月23日から開催された列国議会同盟第63回総会に、共和国は代表を派遣せずにした。また、9月9日の共和国創建28周年記念行事に参加を予定されていた外国代表や在日朝鮮人代表の招待も取り消され、同日の各国在外公館でひらかれる記念行事もいちじるしく規模を縮小した。

このような一種の挫折現象は、人民共和国が前年から積極的に展開して来た対第三世界・非同盟諸国外交の失敗とも、密接に関連している。

75年8月25日に非同盟諸国会議正式参加に成功しているらしい、共和国は非同盟外交を極端に重視し、これを対外政策の重要な柱とするにいたっていた。本年に入ってから、金日成主席特使として3～4月に、朴成哲副総理、孔鎮泰副総理、許淡副総理兼外交部長、金錫基教育委員会委員長、韓シへ外交部副部長、李昌善文化芸術部副部長らを、タンザニア、マダガスカル、ザンビア、ブルンジ、アルジェリア、リビア、シリア、イラク、イエメン・アラブ、民主イエメン、エジプト、セネガル、ギニア、ベニン、トーゴ、ガーナ、カメ

ルーン、赤道ギニア、サントメ・プリンシペ、コンゴ、ペルー、メキシコ、パナマ、ガイアナ、ジャマイカ等25カ国へ派遣した。さらに元首級訪朝者としては、マリ共和国のトラオレ首相(5月14～19日)、パキスタンのブット首相(5月21～26日、ただしパキスタンは非同盟国ではない)、マダガスカルのラチラカ大統領(6月4～11日)、ベニンのケレク大統領(7月10～15日)、ボツワナのカーマ大統領(8月9～13日)を迎えて、大いに対第三世界・非同盟外交工作の実をあげた。非同盟勢力の指導国であるユーゴスラビア、アルジェリアなどとの外交展開も今までになく活発化した。その結果、8月16日からスリランカの首都コロンボでひらかれた第5回非同盟諸国首脳会議には、朴成哲総理、許淡副総理兼外交部長、孔鎮泰副総理ら約120名にのぼる大代表団を送りこむという意気込みを示した。しかし、この会議の前にひらかれた8月9～11日の調整委事務会議と12日からひらかれた政治委員会(外相級)では、朝鮮問題をめぐって議論が紛糾した。スリランカ提案の政治宣言草案にふくまれる朝鮮問題に関する部分について、共和国代表が生まぬるいとして修正案と独自の決議案を提出、さらに中央アフリカ、ガボン、ザイール、モロッコ、ガンビアが中間案を提出したためである。これは、最終的には、共和国提案に近い政治宣言修正と決議の採択によって終ったとされているが、約25カ国の採択保留国が残ったといわれる。この紛糾のために、当初出席を予定されていた金日成主席の参加も中止された。また、首脳会議開始日の8月16日に急きょとりまとめ提出された国連総会向け24カ国共同決議案には、ユーゴスラビア、キューバ、インドを始め、重要諸国が参加せず、前年の43カ国をはるかに下まわってしまった(最終的にはキューバをふくめ35カ国参加)。このことも、のちの決議案撤回の重要な原因になったものと見られている。前記板門店事件も、この首脳会議開幕前夜に起こったものであり、共和国としては首脳会議の何らかの決議やバックアップを期待したものであろうが、そのようなことは起こらなかった。

この非同盟首脳会議の帰趨も、共和国の挫折感に拍車をかけたものと見られる。

南北統一問題については、本年の大半を非常に

硬化した姿勢で通そうとした。南北調節委は完全に中断されたままであり、細々とひらかれつづけた南北赤十字実務者会議においても、共和国赤十字代表は、もっぱら韓国側の国内の反共弾圧を非難しつづけた。特に韓国における総連系墓参団問題を「ねつ造による政治陰謀」とくり返し非難した。注目されるのは、7月21日にひらかれた祖国統一民主主義戦線結成30周年記念報告会が、「南朝鮮の各政党、大衆団体と各階層人民におくる手紙」を採択し、大民族会議のための実務者会議の早急な招集をよびかけたことであろう。ただ、この報告会に対して金主席が送った祝賀文には「こんにち、わが人民の前には、分断された祖国を統一し、革命の全国的勝利をとげなければならない重大な革命課題が提起されています」と明記し、徐哲党政治委員の当日の演説も、その線に沿って、朴政権の退陣と、民主連合政府の樹立をよびかけるものであったから、韓国側の強い反発を受けることとなったのである。

その後も、韓国に対する攻撃・糾弾は激しく行なわれ、とくに9月の民主救国宣言事件裁判をめぐり、その攻撃は頂点に達した。「朴一味は古今東西にない凶悪な殺人者であり、ヒトラーをしのぐファッショ暴君である」（「民主朝鮮」紙、9月4日）とまで極言し、9月5日の祖国統一戦線・祖国平和統一委連合会議は、朴政権を糾弾して「世界各国の民主団体への手紙」を採択した。その後もパリ、ジュネーブなどで記者会見を組織し、朴政権の国際的孤立化のために大々的に運動を展開する。

だがその反面、柔軟姿勢をも見せ始める。8月30日に、東海で韓国漁船シンジン号を拿捕したのち9月2日に赤十字を通じて、「南朝鮮漁船であるならば、早急に送還する用意がある」と通知し、10月13日全乗組員を送還した。さらに金主席は11月9日に会見した小田実に対して、「われわれは朴正熙個人に反対するものではない。（中略）

もし今からでも朴政権がその政策を変えるならば、対話することができる」と語った。この点から見ると、対南関係でも新たな方策を模索しはじめた気配がうかがわれる。

10月半ばから、人民共和国の外交面でいちじるしい失点が生じた。デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドなど北欧4国において共和国大使館員らがタバコ、酒、場合によっては麻薬の密輸入・闇取引に従事していたことが発覚し、次々に国外退去を命じられ、その数は16人にのぼった。これに関連してソ連・東ドイツ駐在大使館からも多数の外交官が帰国した。この影響はスイス、フランス、イラン、オーストリアなどにも及び、それら諸国でも共和国外交官らの行動に嫌疑がかけられていることが明らかとなった。この問題は前年以来、表面化しつつあった共和国の対外債務支払遅延問題と深く関連している。外貨不足による在外公館費用の欠乏を非常手段によって調達する動きが出た反面、支払い遅延で被害をこうむっていたヨーロッパ諸国の反感が、このような形で表面化したものと見られる。

こうして、8月以降次々に起こって来た外交面の苦境を脱するため、ソ連と接近しようとする傾向も次第に濃くなって来た。12月18日に金主席が、誕生70周年を迎えたブレジネフ・ソ連共産党書記長に国旗勲章第1級を授与する政令を公布したことなどが、その象徴的なあらわれである。ソ連に対しては、とくに経済・外貨面での援助の期待が大きいものと観測されている。

中国との関係も悪化させないように慎重に手を打っているが、9月の毛沢東死去後に生じた四人組粛清政変をめぐって、判断に迷っている節も見受けられる。73年以降に金主席が展開した三大革命運動には、中国の文化大革命に学んだ様相がうかがわれ、75年には張春橋が訪朝して交誼をあたためたこともあったからである。

重 要 日 誌

1 月

1日 ▶金日成主席「新年の辞」

2日 ▶「労働新聞」社説「偉大な首領の新年の辞を心にうけとめて革命の新たな勝利のために総進軍しよう」

▶東部チモール民主共和国政府代表团（団長ロジェリオ・ロバト国防相，東部チモール民族解放戦線軍総司令官）平壤着（～6日帰途に）。

▶「労働新聞」論評，朴正熙韓国大統領の新年の辞を，売国逆徒のたわごとと糾弾。

5日 ▶金東奎副主席，東部チモール政府代表团と会見。

▶アジア，アフリカ，ラテンアメリカ人民との連帯週間平壤市大衆集会開催（千里馬文化会館）。

6日 ▶訪中中の久野忠治日朝友好推進連盟会長，中国駐在玄峻極朝鮮大使を訪問。

7日 ▶朝中友誼送油管開通式，現地（地名不明）で盛大に挙行。朝鮮側から孔鎮泰副総理，韓秀吉貿易部副部長，中国側から周化民対外貿易部副部長ら参加（なお，6日に開通慶祝集会在現地で行なわれ，3～4日に中国側現地で開通式，慶祝集会在ひらかれたと報道）。

▶通信代表团（団長金ハクソプ通信部長）中国訪問に出発。

▶朝鮮民航とアフガニスタンのアルリナ・アフカン航空会社間で航空サービス協定締結（於，カブール）。

8日 ▶朝鮮中央通信報道，2.8映画製作所が最近ワイドスクリーン劇映画「農民英雄」（前後編）を製作。

▶シエラレオネ共和国新任特命全権大使，康良煥副主席に信任状提出。

▶「労働新聞」論評，「アジア人民に反対する侵略的結託」，米日防衛協力委員会の結成準備を糾弾。

▶南朝鮮青年学生にたいする朴一味の弾圧と蛮行を糾弾する婦人の弾劾大会開催（於，婦人会館）許貞淑祖国統一民主主義戦線中央委書記長演説。

9日 ▶朝鮮中央論説「われわれは分断された祖国を決して次代にうけつがせられない」

▶金主席，中国周恩来首相の死去に関連し毛沢東党主席に弔電。

▶労働党中央委，中央人民委，周恩来死去にさいし共同決定を採択，①党・政府代表団の派遣，②葬儀前日と当日を全国哀悼の日とする（全機関，工場，企業所，学校，街頭，農村に弔旗掲揚，葬儀日は全国の歌舞中

止）。

10日 ▶「労働新聞」社説「朝鮮人民はわが人民の親しい戦友である周恩来同志の死去に深い哀悼の意を表する」

▶金一総理，中国国务院に弔電。

▶「労働新聞」論評「民族の利益を侵害するいかなる行為も許せない」，大陸棚協定の早期妥結を策する朴一味と日本支配層の策動を糾弾。国の貴重な富と資源を外來侵略者に売りわたす売国的な民族行為であり，他国の海底資源を掌握しようとする侵略行為である。

11日 ▶金亨権同志（金主席の叔父）逝去40周年平壤市追慕会挙行（於，人民文化宮殿），康良煥副主席，徐哲，林春秋，韓益洙，鄭準基，黃長燁，呉白竜ら参加，林春秋「追慕の辞」

▶剣徳鉾山従業員連合集会，今年計画を10月10日前にくりあげ終了し，年末までに新展望計画遂行の生産設備を終了する社会主義競争を全国の工場，企業所の労働者，技術者，事務員によびかける。

12日 ▶「労働新聞」論説「民主主義的行為のためにたたかうことは南朝鮮人民の切迫した課題」

13日 ▶金主席，周恩来の靈前に花輪を送る。儀典局責任幹部が献花，中国側は張春橋副首相，耿飈対外連絡部長，韓竜念外交部副部長，王海容外交部副部長が参加。

▶朝鮮中央通信報道，朝鮮記録映画撮映所がカラー記録映画「繁栄するわが国の社会主義農村」，記録映画「三大革命の旗をかかげて総進軍しよう！」を制作。

▶「労働新聞」「民主朝鮮」カンボジア新憲法の採択を歓迎する論説を掲載。

▶総連活動家祖国訪問団，第21次在日同胞祖国訪問団歓迎平壤市大衆集会開催（於，人民文化宮殿）。

▶「労働新聞」社説「『思想も，技術も，文化もチュエの要求どおりに！』，党のこの革命的スローガンを高くかかげて進もう」——三大革命赤旗爭取運動を画期的な新しい共産主義大衆運動と評価。

▶社会主義労働青年同盟30周年に際し思想研究討論会開催（於，平壤学生少年宮劇劇場）。

14日 ▶金主席，党中央，中央人民委，政務院，駐朝中国大使館に哀悼の花輪を送る。金一ら要人大使館を訪問し弔意を表する。

▶「労働新聞」論説「偉大な首領金日成同志が明かにした全人民武装化方針の正しさとその輝かしい結実」，労

農赤衛隊創建（1959年1月14日）17周年にさいして。

▶桂冠近衛二重チョンリマ青山協同農場の農業勤労者決起集会、全国の協同農場千里馬騎手と農業勤労者に社会主義競争よびかけ。

▶朝中国境河川通航協力委第15回会議合意書調印（於、瀋陽）。

15日 ▶朝鮮中央通信、米帝と朴一味が朝鮮で核戦争を挑発しようと騒いでいると糾弾。

16日 ▶許淡副総理兼外交部長、新任チェコスロバキア大使と会見。

▶朝鮮教育文化活動家聯盟代表団（団長、チェ・ジュンサム教育文化活動家聯盟中央副委員長）日教組第25回全国教育研究集会に参加のため出発。

▶平壤各紙、朴大統領「年頭記者会見」を「分裂を促す戦争をせん動する反逆のたわ言」と糾弾。

17日 ▶「労働新聞」社説、「偉大な首領の新年の辞を心にうけとめて祖国統一の三大路線をいっそう力強く貫徹しよう」

18日 ▶中国と政府間郵便通信、電気通信分野の協力に関する協定調印（於、北京）。

19日 ▶金東奎副主席に、新任チェコスロバキア大使（マルチン・マチュフ）信任状提出。

▶許淡外相、新任タンザニア大使（ジマブ・マレセラ・ルシンデ）と会見。

▶ポーランドと政府間1976～1977年度文化交流協定締結（於、平壤）。

21日 ▶主席特使李宋木外交部副部長ユーゴスラビア訪問（～25日、27日帰国）。

▶金東奎副主席に、新任タンザニア大使（ジョブ・マルセラ・ルシンデ）信任状提出。

▶政府通商代表団（団長、韓秀吉貿易部副部長）、ハンガリーへ出発（27日帰国）。

▶朝鮮中央通信、南朝の「セマウル運動」を非難。

22日 ▶偉大な首領が歩んだ「光復の万里の道」学生青少年の探査行軍出発集会举行（於、七谷の彰徳学校）。

▶軍事停戦委第370回会議開催。

23日 ▶朝鮮労働党出版社創立30周年記念報告会開催（於、2.8文化会館）。

▶ハンガリーと1976年度商品流通・支払協定調印（於、ブダペスト）。

▶社労青創立30周年記念全国青少年スケート・スキー競技大会開催（～2月1日）。

24日 ▶金主席、抗日革命闘士金竜淵同志（人民軍中將）の誕生60周年にさいして、共和国英雄称号を授与する中央人民委政令を公布。

25日 ▶エチオピア駐在大使に朴順逸を任命する政令発

表。

26日 ▶人民共和国保健部とハンガリー人民共和国保健省間に1976～77年度保健・医学科学部門協力計画書調印（於、平壤）。

27日 ▶政府経済代表団（団長、孔鎮泰副総理）ソ連に出发（10日帰国）。

▶マルタ共和国政府代表団（団長、ジョセフ・カサル文相）平壤着（～30日）。

▶「労働新聞」論説、「アメリカ帝国主義の朝鮮戦争挑発準備と沖縄」

29日 ▶金東奎副主席、マルタ政府経済代表団と会見。

▶チェコスロバキア政府通商代表団（団長、アンドレイ・バルチューク外国貿易相）平壤着（～2月3日）。

30日 ▶中央人民委、駐タイ大使に馬昌哲を任命する政令発表。

31日 ▶康良煜副主席、総連活動家訪問団（団長、リュ・ジウオン財政局長）と会見。

▶労働党代表団（団長、金英南）フランス共産党第22回大会参加のための出発（～2月11日帰国）。

2 月

2日 ▶朴成哲副総理、チェコスロバキア政府通商代表団と会見。

▶チェコスロバキアと政府間1976～80年度商品流通・支払協定、1976年商品流通・支払議定書調印（於、平壤）。

5日 ▶人民軍創建28周年記念映画上映週間、各地で開幕。

▶「労働新聞」社説、「党員と勤労者のあいだで階級教育をいっそう強化しよう」

6日 ▶在日総連傘下貿易商社代表団（団長、ユン・ジエス朝日輸出入商社副社長）平壤着（～27日）。

▶中国政府貿易代表団（団長、陳潔対外貿易省次官）平壤着（～14日）。

7日 ▶人民軍創建28周年記念中央報告大会開催（於、2.8文化会館）、金鉄万上將報告。

▶人民軍創建28周年記念平壤市学生少年慶祝公演開催（於、平壤）、金日成主席、金聖愛夫人を伴い観覧（金主席は44日ぶりで公式席上に再出現）。

▶崔賢人民武力部長、各国大使館武官と会見、張正桓人民武力部副部長同席、ソ連大使館イリロフ武官が代表して祝賀あいさつ。

▶フランス共産党マルシェ書記長、朝鮮労働党代表団（団長、金英南）と会見。

8日 ▶金主席、人民軍区分隊を訪れ、将兵を祝賀。

▶人民軍創建28周年記念「一当百杯」体育競技大会開

幕。

9日 ▶康良煥副主席，帰国するデンマーク王国大使と会見。

▶朴成哲副総理，中国政府貿易代表団と会見。

▶中国と政府間1976年度商品交流に関する議定書調印（於，平壤）。

▶ソ連と政府間1976年～1980年商品相互供給・支払協定調印（於，モスクワ）。

10日 ▶ポーランドと政府間1976～80年間商品相互供給・支払協定，1976年度商品相互供給・支払議定書調印（於，平壤）。

▶朴成哲副総理，ポーランド政府通商代表団と会見。

▶シリア・アラブ共和国石油・鉱物資源省代表団（団長，M.B. アタイエ次官）平壤着。

▶「労働新聞」論説「南朝鮮人民の民主主義運動を支持声援することは統一を促進する道である」

12日 ▶第15回南北赤十字実務者会議開催（於，板門店）——共和国代表南朝鮮赤十字側の誤った立場と南朝鮮当局者の妨害策動を攻撃，さらに朝総連系在日僑胞故郷訪問を政治的謀略と断罪。

▶労働党代表団（団長，孫成弼党中央候補，政務院部長）デンマーク訪問（デンマーク，スエーデン，フィンランド，ノルウェー，イタリアをへて3月30日帰国）。

▶労働党代表団（団長，金寛燮中央委，対外文化連絡協会委員長）ベルギー訪問（ベルギー，スイス，オランダ，ルクセンブルク，西ドイツをへて4月6日帰国）。

15日 ▶ソ連と政府間1976～77年度文化交流計画書調印（於，平壤）。

▶外交部スポークスマン声明，フランス植民地主義者のソマリア侵攻を糾弾。

▶第12回国家美術展開幕（於，朝鮮美術博物館）。

16日 ▶第1回全国青少年学生の忠誠の祝典いっせいに開幕——各機関，企業所，協同農場，各級学校の地方祝典に始まり中央祝典で幕をとじる。政治，経済，芸術，体育各部門別に行なわれる。平壤市開幕式は万寿台丘の金日成銅像前で挙行（～4月15日，平壤学生少年宮殿で閉幕式）。（注，この日は金正一の誕生日にあたる）

▶体育人の忠誠の模範競技開催（於，平壤体育館），鄭準基副総理演説。

▶朝鮮少年団平壤市連合団体大会開催（於，牡丹峰競技場）——父なる元帥と栄えある党中央に永遠に忠誠をつくすことを誓う忠誠の大会。

▶「労働新聞」編集局論説，タンザニアが韓国と貿易関係を断絶したことを歓迎。

17日 ▶シリア・アラブ共和国政府貿易代表団（団長，スラッラ・スラッラ企画担当國務相）平壤着（～24日）。

▶アルバニア政府通商代表団（団長，ラムビ・レカ交通省次官）平壤着（～13日）。

▶ブルガリア文化芸術委委員長（ルドミラ・ジフコフ）一行平壤着（～20日）。

18日 ▶「労働新聞」論説，「偉大な首領に永遠に忠誠をつくすことはわが人民の確固たる革命的意志であり信念である」

19日 ▶金主席，ブルガリア文化芸術委員会ジフコフ委員長を接見。金聖愛，金貞淑同席。

20日 ▶朝鮮国際保険会社代表団（団長，ペク・ミョンロン社長），アジア・アフリカ保険・再保険連盟第11回執行委員会会議に参加するためカイロへ出発。

21日 ▶「労働新聞」論説『三大革命赤旗争取運動』は全社会のチュチェ思想化偉業を促す大衆的進軍運動

22日 ▶「労働新聞」論説，「南朝鮮社会を民主化することに関する方針に祖国統一を早める戦闘的綱領」

▶赤十字会代表団声明，南朝鮮側「首席代表」のアメリカ各地における演説行為を不純な策動として糾弾。

▶労働党代表団（団長，朴成哲副総理）ソ連共産党第25回大会参加のため平壤発（～6日帰国）。

23日 ▶金主席，シリア政府貿易代表団と会見。許淡副総理，桂応泰貿易部長同席。

▶シリア・アラブ共和国と政府間1976年度商品流通に関する議定書調印（於，平壤）。

▶「労働新聞」論評「人間の尊厳を踏みにじる軍事ファシズム支配を終息させなければならない」

26日 ▶共和国サッカーチーム，ジャカルタのオリンピック・アジア地域2組予選（15～26日）で5戦5勝し，第21回オリンピック大会参加資格獲得。

▶軍事停戦委朝中側首席委員韓柱庚少将，中立国監視委員会に手紙を送る（F111戦闘爆撃機の韓国導入に関し）。

▶軍事停戦委第371回会議開催。

27日 ▶金主席，安州地区の都市建設事業を現地指導。

▶外交部声明，南朝鮮占領米軍の武力増強策動を糾弾（24日にF111最新型戦闘爆撃機を韓国に搬入したことに関し）。

▶朴成哲副総理，ソ連共産党第25回大会で祝賀演説。

28日 ▶ソ連との1976年度通商議定書調印（於，モスクワ）。

▶政府貿易代表団（団長，韓秀吉貿易部副部長）民主体ドイツ，キューバ訪問に出発（～3月16日帰国）。

▶「労働新聞」論評「朝鮮におけるアメリカ帝国主義の核戦争挑発策動は阻止されなければならない」

29日 ▶外交部声明，米帝はカンボジアに対する一切の挑発行動を打ち切るべきである（2月25日のシエムレア

プ市爆撃に関し)。

▶3・1 人民蜂起 57 周年平壤市記念報告会開催。許貞淑祖国統一民主主義戦線中央書記局長演説。

3 月

1 日 ▶金主席安州地区の農村事業を現地指導。

▶「労働新聞」社説「アメリカ帝国主義の侵略と戦争の政策を破綻させ祖国統一の民族的偉業を達成しよう」

2 日 ▶「労働新聞」論評「アメリカ帝国主義侵略軍は南朝鮮からすみやかに撤退せよ！」

4 日 ▶最高人民会議常設会議、米帝、南朝鮮当局の戦争策動について、世界各国の国会と政府に手紙を送る。

▶金主席参席下、全国農業部門活動者会議開催（～5 日）。

▶国連駐在オブザーバー代表部代理代表記者会見、アメリカの新戦争挑発策動を糾弾。

5 日 ▶「労働新聞」社説「わが国の農村に世紀的変革をもたらした偉大な首領の大きな恩恵に農業生産のより高い高揚でむくいよう」

▶朝鮮中央通信、ロッキード事件を論評。

6 日 ▶祖国統一民主主義戦線中央委声明、民主人士と宗教人に対する朴一味の弾圧を糾弾。

7 日 ▶南日副総理不慮の事故死（64歳）。

8 日 ▶党中央委、中央人民委、政務院、南日葬儀委員会を構成、葬儀を国葬にすると発表。

▶金主席ら南日霊柩を弔問、中国大使ら各国外交代表も弔問（中国、ベトナム、南ベトナム共和、民主カンボジアの各大使館から花輪がおくられた）。

▶ポーランドと政府間科学技術協力分科委員会第 4 回会議議定書調印（於、平壤）。

9 日 ▶ソ連映画代表团（団長、アレキサンドロフ内閣国家映画委副委員長）平壤着。

▶南日国葬挙行、康良煜副主席ら首脳参列（金主席不参加）。

10 日 ▶チトー・ユーゴスラビア大統領から金主席に親書が寄せられる（大使より金東奎副主席に伝達）。

▶最近、東ドイツと 1976 年度商品相互供給・支払協定調印（於、ベルリン）と報道。

▶「労働新聞」論評、南朝鮮で実施中のアメリカの「黄竜作戦」を、きわめて挑発的な軍事演習と糾弾。

▶朝鮮中央通信、朴正熙の不正蓄財と腐敗行為を暴露——朴正熙逆賊をそのままにはしておけないことは、時代の要求であり、南朝鮮人民の一致した指向である。

▶「労働新聞」論説「南朝鮮がいらい一味の『安保第一主義』の売国反民族的正体」

11 日 ▶朝鮮記者同盟創立 30 周年記念報告会開催（於、

人民文化宮殿）、党中央祝賀文を林春秋が伝達。

▶金主席の穩城地区進出とワンジェ山会議 43 周年記念、咸鏡北道報告会開催（於、ワンジェ山麓）。

▶アルバニアと政府間 1976～80 年長期貿易協定、1976 年商品納入・支払議定書調印（於、平壤）。

12 日 ▶日本放送協会代表团（団長、佐野一雄ニュースセンター編集長）平壤着（～17 日）。

▶在日朝鮮人卓球選手団、第 22 次在日同胞祖国訪問団平壤着（～4 月 4 日）。

▶孔鎮泰副総理、アルバニア政府通商代表团と会見。

▶共和国文化芸術部とソ連内閣国家映画委員会間 1976 年度映画部門協力に関する事業計画書調印（於、平壤）。

13 日 ▶スイス駐在新任大使に陳忠国を任命する政令公布。

▶中国全国人民代表大会常務委員会より、最高人民会議常設会議に回答の手紙が寄せられる（3 月 4 日付手紙への回答）。

▶政府貿易代表团（団長、李泰白貿易部副部長）インド、パキスタン訪問に出発。

15 日 ▶康良煜副主席にブルンジ共和国新任大使（シモン・サビンボナ）信任状提出。

▶共和国農業委とルーマニア農業・食料工業省間の農業分野科学技術協力協定調印（於、平壤）。

16 日 ▶金主席特使ハン・シへ外交部副部長セネガル共和国訪問に出発（ギニア、ベニンをも訪問し、4 月 10 日帰国）。

▶政府代表团（団長、孔鎮泰副総理）チュニジア独立 20 周年記念行事参加のため出発。（リビア、イエメン、民主イエメン、エジプトをへて 4 月 27 日帰国）

▶日本「世界」誌安江編集長平壤着（～4 月 2 日）。

▶最近朝鮮記録映画撮映所、カラー記録映画「不滅の跡をたどり」（祖国解放戦争時期編・上）と「ラテンアメリカ大陸に輝く偉大なチュチェ思想」を制作と報道。

17 日 ▶呉振宇人民軍総参謀長、パキスタン海軍大学見学団（団長、イクバル・ファジャル・クアディル准将、海軍大学学長）と会見。

▶ユーゴスラビア連邦共和国議会グリゴロフ議長から、最高人民会議常設会議へ回答の手紙。

19 日 ▶ソ連『プラウダ』、最高人民会議常設会議の手紙を支持する記事発表。

▶キューバ駐在新任大使に李インチョンを任命する政令発表。

▶最近、キューバ共和国との 1976～80 年度商品交流協定、1976 年度通商議定書が調印された（於、ハバナ）と報道。

▶フランス国民議会（下院）の「朝鮮民主主義人民共

和国との経済・文化・友好関係拡大のための研究グループ」代表団（団長、ピエール・ベルナルド・クステ同グループ委員長）平壤着。

▶金主席夫妻、音楽舞踊叙事演劇「大部隊旋回作戦」を観覧。

▶黄長燁最高人民会議常設会議議長、フランス国民議会（下院）代表団と会見。

▶第22次在日同胞祖国訪問団歓迎平壤城市群集會開催（於、牡丹峰劇場）。

20日 ▶最近、オーストリア共和国と政府間経済・技術協力に関する協定調印（於、ワガドゥー）と報道。

22日 ▶康良燧副主席・許淡副総理・外交部長、フランス国民議会（下院）代表団と会見。

23日 ▶金主席特使李昌善文化芸術部長、ペルー共和国訪問に出発（メキシコ、ペルー、パナマ、ガイアナ、ジャマイカをへて5月11日帰国）。

▶金主席特使金錫基教育委員長、トーゴ共和国訪問に出発（トーゴ、ガーナ、カメルーン、赤道ギニア、サントメ・プリンシペ、コンゴ、東ドイツを経て5月18日帰国）。

▶社会主義エチオピア政府友好代表団（団長、モゲス・ウォルデ・マイクル臨時軍事評議会経済委員長）平壤着（～30日）。

25日 ▶朝鮮文学美術総同盟創立30周年記念報告会開催（於、平壤大劇場）。

▶平壤各紙、韓米海軍共同水陸機動訓練（3月25日より28日間、呼称「モーレックス」）を断固糾弾——このような戦争挑発策動によって、こんにち朝鮮で緊張はさらに激化しており、任意の時刻に戦争が起ころうる危険がつくりだされている。

▶「三大革命赤旗争取運動」社会科学討論会開催。

26日 ▶金主席、社会主義エチオピア政府友好代表団を接見。鄭準基副総理同席。

▶労働党代表団（団長楊亨燮党中央政治委員・書記）、ブルガリア共産党第11回大会参加のため出発（～4月6日帰国）。

▶金主席特使孔鎮泰副総理、リビア・アラブ共和国を訪問（シリア・アラブ、イラク、チュニジア、イエメン・アラブ、イエメン人民、エジプト・アラブをへて4月27日帰国）。

28日 ▶金主席、安江良介「世界」編集局長を接見。金英南ら同席。

▶政府代表団（団長、許淡副総理兼外交部長）、ビルマ、ユーゴスラビア訪問に出発（～4月12日帰国）。

▶第176次帰国船万景峰号、清津港着。

▶「労働新聞」論評、朴大統領の陸軍士官学校、空軍

士官学校卒業式論示を糾弾。

29日 ▶キューバ共和国と政府間1976～77年度文化交流計画書調印（於、平壤）。

▶社会主義エチオピア政府友好代表団歓迎平壤市大衆集会開催（於、人民文化宮殿）。

30日 ▶鄭準基副総理、第22次在日同胞祖国訪問団と会見。

▶金主席特使朴成哲副総理、タンザニア連合共和国訪問に出発（マダガスカル民主共和国、ザンビア共和国、ブルンジ共和国を訪問し4月20日帰国）。

▶康良燧副主席に民主イエメン新任大使（アリ・シアリフ・マウワド）信任状提出。

▶外交部スポークスマン声明、米軍の軍備増強と戦争挑発策動を糾弾。

31日 ▶軍事停戦委第372回会議開催。

▶金主席誕生64周年記念「万景台賞」体育競技大会開幕。

4 月

1日 ▶朝9時頃、戦線東部メボン東南方非武装地帯人民軍哨所が数十発の自動火器射撃を、11時25分頃ヘサムデ西南方非武装地帯人民軍哨所が100余発の自動火器射撃を受ける。

▶朝鮮国民会創建59周年記念全国「祖国統一賞」マラソン競技大会開催。

2日 ▶在日朝鮮商工人代表団（団長、ムン・ドンゴン朝鮮画報社長）平壤着（～23日）。

▶キューバ外務省代表団（団長、ホセ・アルマンド・ゲラメンチェロ、アジア局長）平壤着。

3日 ▶軍事停戦委第373回会議開催。

▶金主席指導下に労働党咸鏡北道委総会拡大会議開催（～5日）。これに先立ち金主席は15日間にわたり道内重要工場、企業所、文化施設を視察し金策製鉄連合企業所関係部門活動家協議会、化学工業部門活動家協議会、農業部門活動家協議会ははじめ各部門協議会を招集指導した——本総会には玄武光、延亨默、李鍾玉、金煥ら参加。

4日 ▶金主席、人民武力部、党平安南道委、平安南道行政委など、毛岸英墓、中国人民志願軍烈士墓に花輪を献ずる。

7日 ▶「労働新聞」論説「朝鮮人民に反対するアメリカ帝国主義の最後の氣遣いじみた軍事的冒険」——アメリカ帝国主義は朝鮮における核戦争の危険をつくりだすことによって一連の目的を追求している。まず核戦争による威嚇を通じて朝鮮で緊張を極度に激化させ、それを口実にして南朝鮮からアメリカ軍を撤退させる義務を免れようとしている等と糾弾。

8日 ▶政府代表团(許淡)のユーゴスラビア訪問に関する共同報道発表(於、ベオグラード)、——第5回非同盟諸国首脳会議準備などについて合意、ユーゴ側は朝鮮の平和的統一のための正義の闘争を支持。

▶映画上映旬間全国各地で開幕(〜22日)、上映品目「偉大な首領金日成同志の現地指導」「偉大な首領をあおぎて党創立30周年を盛大に記念」「偉大な首領が行った対外活動」(第22号〜31号)(以上記録映画)、「首領はいつもわれらとともに」「不滅の足跡をたどり」「カンソンの夕焼け」「繁栄するわが社会主義農村」「山頂のトンビ」「農民英雄」「戦車兵たち」「敵中都市で」(以上芸術作品)など。

13日 ▶中国「人民日報」、ソ連「プラウダ」紙、労働党咸鏡北道委総会拡大会議を報道(12日「タス通信」報道)。

▶アンゴラ人民共和国と外交関係樹立に関連した共同コミュニケ発表(於、ルアンダ)——1975年11月16日両国間に外交関係を結び大使級外交代表を交換することに合意をみていたもの。

14日 ▶国連常任ブルンジ共和国常任代理代表パトリス・ミカナキ夫妻平壤着(〜23日)。

15日 ▶金主席誕生64周年に際して統一革命党中央委から祝賀文——金主席を「人類の英才」「不出世の伝説的英雄」「民族の太陽」「救世済民の太陽」「世界革命の卓越した指導者」とよび「千世万代・不滅の金日成主義の旗じるしを永遠に守る忠誠の誓い」をのべる。

▶金主席誕生64周年記念朝鮮少年団全国連合団体大会開催(於、赤旗万景台革命学院)——偉大な首領金日成元帥と栄えある党中央に限りなく忠実な近衛隊、決死隊として永遠に忠誠を尽くすことを宣誓。

▶職盟、農勤盟、社労青、女盟の各級組織別に首領の革命思想体得のための講演会を広範に行なっている。

▶「労働新聞」社説「偉大な首領をおしただき一つの心、一つの志でたくましく前進するわが人民は百戦百勝である」

16日 ▶金主席、訪朝中の朝鮮人民との連帯ベルギー代表团(レミ・ジレス、ベルギー共産党中央委、ベルギー朝鮮友好協会書記長、ポリテ・ビエルソン、ブリュッセル総合大学講師ら)を接見。

▶駐朝各国外交代表を招き、革命歌劇「明るい太陽の下で」を上演(於、2.8文化会館)。

▶政府代表团(団長、李泰白貿易部副部長)民主カンボジアを訪問。

17日 ▶平壤各紙、アメリカ空母ミッドウェー号の釜山寄港(4月15日)を糾弾する論評を掲載。

▶シリア独立30周年記念平壤市大衆集会開催(於、牡

丹峰劇場)。

▶民主カンボジア独立1周年平壤市記念集会開催(於、人民文化宮殿)。

18日 ▶金主席、訪朝中のルーマニア共産党中央委機関紙「スクィンテア」代表团を接見。金英南、金貴南労働新聞主筆同席。

▶南北調節委北側スポークスマン声明、南側の古美術品交換展示会提案を、不純な政治目的を追究する欺瞞劇と糾弾。

▶南朝鮮人民4・19蜂起16周年記念平壤市記念報告会開催(於、牡丹峰劇場)、洪起文祖國平和統一委員会委員長報告。

19日 ▶最近、中国「新華通信」が「金日成主席の賢明な指導のもとに朝鮮の革命と建設では大変好ましい情勢がつくりだされている」と題する記事を發表したと報道。

▶政府代表团(団長、許淡副総理兼外交部長)ハンガリー訪問に出発(アルジェリアをへて4月30日帰国)。

▶鄭準基副総理、中国民航代表团と会見。

▶共和国農業委とハンガリー農業・食糧省間1976〜77年度農業部門科学技術協力に関する事業計画書調印(於、平壤)。

20日 ▶人民武力部、ブルンジ共和国軍事代表团(団長、バガザ大佐、武力軍第1副総参議長〜24日)を招宴、黄鉄山中将参加。

▶第23次在外同胞祖国訪問団歓迎平壤市大衆集会開催(於、2.8文化会館)。

21日 ▶康盤石女史(金主席生母)誕生84周年にさいし、在日朝鮮人代表团、在日朝鮮商工人代表团、同体育人代表团、卓球選手団、第23次祖国訪問団、万景台革命史跡を訪問し女史の墓所に花輪献上。

22日 ▶康良煜副主席、在日朝鮮商工人代表团と会見。

▶平壤各紙、レーニン生誕106周年記念論説を掲載。

23日 ▶国連駐在ガイアナ協同共和国常任代表ラシレイ・エスモンド・ジャクソン平壤着(〜5月4日)。

▶ネパール王国元首相・民族評議会議員キルティ・ネディ・ビスタ夫妻平壤着(〜5月4日)。

▶アジア卓球連盟マイケル・チェン副委員長平壤着。

▶全アフリカ青年運動代表团、アルジェリア全国青年同盟代表团平壤着。

24日 ▶朝鮮人民革命軍創設44周年記念中央講演報告会開催(於、万寿台議事堂)、党中央委政治委各委員、党中央委各秘書、政務院各副総理、党中央委各部長、人民軍将官など参加。

▶呉振宇人民軍総参謀長、ブルンジ軍事代表团と会見。

▶第三世界諸国青年の闘争を支持する平壤市青年学生集会開催（於、学生少年宮殿）。

▶朝鮮中央通信、沖縄駐屯米軍の実弾射撃演習（3月末から実施と22日沖縄駐屯米海兵隊スポークスマン公開）を糾弾。

▶金主席、ブルンジ軍事代表団一行に勲章を授与（康良煜副主席が式上で授与）。

▶第3回アジア卓球選手権大会参加代表団歓迎平壤市大衆集会開催（於、人民文化宮殿）。

25日 ▶「労働新聞」社説「第3回アジア卓球選手権大会を熱烈に祝う」

▶第3回アジア卓球選手権大会開幕式（於、牡丹峰競技場、31の国と地域の代表団、450余人の選手参加）（～5月7日）。

26日 ▶「労働新聞」論評「何故にフォードは日本の軍事力増強を奨励するのか」

27日 ▶金主席席下、最高人民会議第5期第6回会議開催（～29日）——議案①1975年度国家予算執行に関する決算と1976年度国家予算について（金敬連財政相）、②わが国における先進的な幼児保育教育制度をいっそう強化発展させることについて（鄭準基副総理）、③組織問題。

▶康良煜副主席、帰国するザイル大使と会見。

▶日朝友好宮城県労働者代表団（団長、高橋治宮城県労評議長）平壤着（～5月11日）。

▶国際卓球連盟H・ロイ・エバンス委員長夫妻、A・K・ピント名誉書記長夫妻、ジャン・メルシェ財政主任夫妻、平壤着。

▶スイス進歩組織代表団（団長、エドワルド・ハフネル書記長、朝鮮統一支持スイス委員会委員長）平壤着（～5月8日）。

▶第1回中国友好参観団（団長、楊広立江蘇省党委員会書記、革命委副主任）平壤着（～5月18日）。

28日 ▶最高人民会議第2日（第2議案）。

▶世界保健機構（WHO）第29回総会に参加する共和国代表団（団長、ハン・フンソプ保健部副部長）出発（～5月27日帰国）。

▶アジア卓球連盟総会開催（～5月7日）。

29日 ▶最高人民会議第3日（第3議案）——金一総理健康上の理由により辞表提出、金一を第一副主席に選出、後任総理に朴成哲を選出。会議閉幕（「朝鮮民主主義人民共和国幼児保育教育法」を採択）。

▶ソ朝友好協会全連盟第4回代表者会議開催（於、モスクワ）。

▶民主カンボジアと貿易支払協定調印（於、プノンペン）。

30日 ▶吳振宇人民軍総参謀長、中国人民解放軍歌舞団一行と会見。

▶第3回アジア卓球選手権大会団体戦終了——朝鮮女子チーム優勝、男子チーム第3位。

▶国連貿易開発会議（UNCTAD）第4回会議に参加する政府代表団（団長、金敬連財政部長）出発（～5月24日帰国）。

▶アジア卓球連盟城戸尚夫委員長、平壤着（～5月11日）。

▶コンゴ人民共和国ブラザビル・マツア中等学校で朝鮮の協力でつくった実験室を委譲する集会開催。

5月

1日 ▶中国「人民日報」「光明日報」「解放軍報」紙と北京放送、共和国最高人民会議が成功裏に終了と報道。

▶平壤市動労者ら2万余人、ルンラ島で多彩な芸術公演、レクリエーションでメーデーを慶祝。

2日 ▶金主席、国連駐在ガイアナ協同共和国代表を接見。

▶金主席夫妻、ネパール王国元首相・現民族評議会議員ビスタ夫妻を接見。

▶平壤万寿台芸術団、招待公演のためフィンランドへ出発（フィンランド、スウェーデン公演を終え26日帰国）。

3日 ▶中国人民解放軍歌舞団公演開幕（於、平壤大劇場）。

▶「労働新聞」評論員論評「アメリカ帝国主義は朝鮮人民に対する軍事的冒険を中止せよ」

▶共和国放送委とベニン「革命の声」放送局間にラジオ・テレビ放送協力協定締結（於、コトヌ）。

4日 ▶「労働新聞」記念論説「マルクスの輝かしい革命的業績は不滅である」（マルクス生誕158周年）。

▶祖国光復会創建40周年記念中央報告大会開催（於、人民文化宮殿）、林春秋党中央委政治委員報告。

5日 ▶社労青中央委、学生委声明、朴一味の「学園浸透スパイ団事件」による青年学生弾圧を糾弾。

▶「民主朝鮮」紙論評「南朝鮮がいろいろ一味はファッションの暴行を実行を直ちにうちきれ」——「民主救国宣言」関連者裁判を糾弾。

6日 ▶朴成哲総理、許淡外交部長、帰国するインド大使（R. K. ジェラド）とそれぞれ会見。

▶許淡外交部長、新任マダガスカル民主共和国大使（ラユトフリカ・クレサン・ソロヘリ）と会見。

▶サハラ・アラブ政府代表団（団長、モハメド・サレム・ウルド・サレク公報担当国務書記）平壤着（～14日）。

▶スイス進歩組織代表団歓迎平壤市大衆集会開催（於、

牡丹峰劇場)。

7日 ▶金東奎主席、スイス進歩組織代表団と会見。

8日 ▶金主席、新任マダガスカル大使と会見。

▶サハラ・アラブ政府代表団歓迎韓柱庚同志所属区分隊服務者集会開催。

9日 ▶日朝友好宮城県労働者朝鮮訪問団歓迎平壤市労働者集会開催 (於、中央労働者会館)。

10日 ▶朴成哲総理、サハラ・アラブ政府代表団と会見。

▶発展途上国「77カ国グループ」閣僚会議、人民共和国の加入を満場一致決定 (於、ケニアのナイロビ)。

11日 ▶第24次在日同胞祖国訪問団平壤着 (～6月7日)。

12日 ▶イランのパーレビ公主殿下に金主席が送る贈物伝達式開催 (於イラン、ガーラン州クジュスパン、贈物は田植地)。

▶パキスタン駐在大使に張ハクミンを任命する政令発表。

▶政府貿易代表団 (団長、李泰白貿易部副部長) メキシコ訪問に出発 (メキシコ、エクアドル、ベネズエラ、エルサルバドルをへて7月11日帰国)。

▶第4回国連貿易開発会議 (於、ナイロビ) に参加中の日本代表団首席代表木村俊夫の招待宴に人民共和国代表団長金敬連出席。

13日 ▶最近、各地協同農場で田植えが始まったと報告。

▶軍事停戦委第374回会議開催。

▶ユーゴスラビアと政府間科学技術協力混成委第1回議定書調印 (於、ベオグラード、同会議5月4日～13日)。

14日 ▶平壤各紙、金主席の安江「世界」編集長との談話を掲載 (談話は3月28日)。

▶マリ共和国ムッサ・トラオレ軍事解放委員長、国家首班兼政府首相夫妻一行平壤着、金主席夫妻空港に出迎え。夜盛大な宴会 (～19日)。

▶崔賢人民武力部長を解任し国防副委員長に任命、後任人民武力部長に呉振宇総参謀長を任命する中央人民委員会政令公布。

15日 ▶金主席、トラオレ首相会談開催、朴成哲、鄭準基、許淡、孔鎮泰ら同席。

▶トラオレ首相歓迎、革命歌劇「党の真の娘」公演。

▶朝ソ友好協会とソ連対外友好文化連協会連盟、ソ朝友好協会1976～77年度協力計画書調印 (於、平壤)。

▶労働党代表団 (団長、徐哲党中央委政治委員) ドイツ社会主義統一党第9回大会参加のため出発 (～24日)。

16日 ▶洪元吉副総理、長期間の病気のため死去 (52歳)、国家葬儀委構成。

▶「労働新聞」論説「南朝鮮の売国ファシスト一味は人民の要求にしたがい『政権』の座から退け」

▶祖国平和統一委員会弾劾文発表、「朴正熙がいらい一味は、自由と民主主義の悪らつな絞殺者、兇悪な民族屠殺者であり、醜い売国奴、戦争狂であり、平和統一の極悪な敵である」

17日 ▶金主席、洪元吉霊柩を弔問。

▶金東奎副主席、帰国するモンゴル大使 (オチリン・チェンド) と会見。

▶鄭準基副総理、第1次中国友好参観団と会見。

▶パレスチナ人民の闘争を支持する大衆集会開催 (於、千里馬文化会館)。

18日 ▶トラオレ首相歓迎平壤市民大会開催、金主席夫妻参席。

▶金主席、トラオレ首相会談、夜、人民文化宮殿で盛大な宴会。

▶エジプト軍事代表団 (団長、アブドル・ガーニ・ガマシ大将、副首相兼国防・軍需生産相) 平壤着 (～25日)。

▶呉振宇人民武力部長、エジプト軍事代表団と会見。

▶洪元吉国葬執行、康良煜副主席ら参席。

▶マリ共和国と科学・技術的協力に関する合意書調印 (於、平壤)。

19日 ▶マリ共和国との共同コミニケ発表 (於、平壤)。

20日 ▶「労働新聞」社説「統一問題の主動的進路を明示した戦闘的綱領」——金主席の「世界」編集長との談話を「わが党と共和国政府の国際主義的責任感を具現した歴史的労作」と評価。

▶ルーマニアと政府間1976～77年度文化交流計画書調印。

21日 ▶パキスタン回教共和国ズルフィカル・アリ・ブット首相夫妻一行平壤着 (～16日)。金主席夫妻空港に出迎え。会談、歓迎宴。

▶在日朝総連活動家代表団 (団長、ファン・ウイスン中央常任委政治局副局長) 平壤着 (～7月9日)。

▶ルーマニアと科学院間1976～78年度科学協力に関する事業計画書調印 (於、ブカレスト)。

22日 ▶金主席、ブット首相と会談、朴成哲、呉振宇、鄭準基、許淡、孔鎮泰ら同席。

▶金主席、エジプト軍事代表団を接見。呉振宇、張正桓中将同席。

23日 ▶金主席、ブット首相と単一会談。

▶エジプト軍事代表団歓迎平壤市大衆集会開催 (於、人民文化宮殿)。

▶呉振宇人民武力部長、ソ連陸海空軍志願後援協会代

表団（団長、アレクサンドル、イワノビッチ・ポクリシユキン空軍元帥、同協会委員長）と会見。

24日 ▶朝ソ経済・科学技術協力常設分科委（第10回）議定書が調印（於、モスクワ、同会議5月19日～24日）。

▶共和国軍事代表団、エジプト軍事代表団と会談と報道。呉振宇人民武力議長、張正桓、趙明祿、芳哲甲各中将参加。

▶パキスタンと軍事関係首脳会談開催。呉振宇人民武力部長、趙明祿中将参加。

▶金主席の演説「文化人は文化戦線の闘士とならなければならない」（1946年5月24日）発表30周年記念講演報告会開催。

25日 ▶金主席、パキスタン新聞、通信、テレビ、ラジオ放送記者らを接見。

▶ナイジェリアとの外交関係樹立に関する共同コミュニケ発表（於、北京）。

▶午後2時20分頃、前線中部チュクトン南部非武装地帯人民軍哨所、57ミリ無反動砲で射撃される。

▶ブット首相歓迎平壤市民大会開催（於、平壤体育館）金主席夫妻参列。

▶金一副主席、帰国する中国大使（李雲川）と会見。

▶共和国代表団（団長、李宗木外交部副部長）非同盟諸国調定委外相会議参加のためアルジェリアに出発（～6月8日帰国）。

26日 ▶金主席、朴総理、ウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニヤ地震に関し、ソ連の党・政府幹部に慰問電。

▶パキスタンと政府間経済・技術協力に関する合意書調印（於、平壤）。

▶パキスタン回教共和国との共同コミュニケ（28日発表）。

28日 ▶イラク政府民間航空代表団（団長、サミ・ハッサン・マフマド民間航空機構委員会副委員長）平壤着（～6月4日）。

▶日本北海道労働文化交流代表団（小納谷幸一郎全北海道労組協議会副議長）平壤着（～6月4日）。

▶南北調節委共和国側スポークスマン声明、南朝鮮側の軍事挑発を糾弾。

▶スーダン5月革命勝利7周年記念平壤市大衆集会開催（於、牡丹峰劇場）。

30日 ▶金主席、ベルギー社会党アンドレ・レオナルド第1全国書記を接見。

31日 ▶金主席、在日朝鮮人代表団（団長、カン・グンジョ総連中央監査委員長）を接見。金英南同席。

▶李宝益女史（金主席祖母）生誕百周年にさいし、在日朝鮮人代表団、総連活動家代表団墓所に花輪を進呈。

6月

1日 ▶バプア・ニューギニア自主国家と大使クラス外交関係樹立の共同コミュニケ発表。

▶金主席、帰国する中国李雲川大使を接見。許淡副総理・外交部長同席。

▶ボフスラフ・フニョベク、チェコスロバキア外相平壤着（～5日）。

▶シエラレオネ共和国国会代表団（団長、P.R. デービス国会議長）平壤着（～8日）。

▶政府代表団（団長、孔鎮泰副総理）、ハンガリー、ソ連に出発（～13日帰国）。

▶労働党代表団（団長、金国勲党中央委、職総中央委員長）、ギリシャ共産党（国内）大会参加のため出発。

▶「幼児保育教育法」実施、6・1国際児童節記念平壤市幼稚園児体育競技大会開催（於、平壤体育館）。

2日 ▶金主席、中国人民解放軍歌舞団公演を観覧。

3日 ▶金主席、チェコスロバキア外相を接見。許淡副総理・外交部長同席。

▶朴総理、駐国連モーリシャス常任代表（ラドハ・クリキナ・ラムブル）と会見。

▶ノルウェー社会主義左翼党代表団（団長、ベリトオス副委員長）平壤着（～12日）。

▶第25次在日同胞祖国訪問団、平壤着。

▶ガンビア人民進歩党代表団（団長、ジャルロウ・サンネフ全国執行委員、行政書記）平壤着（～15日）。

▶日本新潟市代表団（団長、川上喜八郎新潟市長）平壤着（～11日）。

▶日朝文化交流協会代表団（団長、大本泰之常任理事）平壤着（～6日）。

▶イラクと政府間航空運輸協定締結（於、平壤）。

▶金亨稷先生（金主席の父）逝去50周年中央追悼会開催（於、人民文化宮殿）、林春秋「追悼の辞」。

4日 ▶リビア・アラブ共和国駐在大使に金ドウチルを任命する政令発表。

▶マダガスカル民主共和国ディディエール・ラチラカ大統領夫妻平壤着（～11日）。金主席夫妻空港に出迎え、宴会。

▶金主席、朴総理、雲南省地震に関し中国の党・政府指導者に慰問電を送る。

▶軍事停戦委第375回会議開催。

5日 ▶金主席、ラチラカ大統領会談。朴成哲、鄭準基、許淡ら同席。

▶朝鮮少年団創立30周年記念全国連合団体大会開催（於、平壤体育館）、金主席祝賀文を楊亨燮伝達。

6日 ▶金主席、ラチラカ大統領と単一会談。

8日 ▶ビルマと航空に関する協定調印（於、ラングー

ン)。

▶在日朝鮮商工人代表団平壤着(～7月2日)。

▶万景台人民学校を「順和学校」とする中央委政令発表(金亨稷が教鞭をとった当時の名称に返した)。

▶キューバ革命守護委代表団平壤着(～22日)。

9日▶ラチラカ大統領歓迎平壤市民大会開催(於、平壤体育館)、金主席夫妻参席。

▶第17回赤十字実務会議開催(於、板門店)——共和国赤十字代表は「条件環境問題から解決しなければならない」と強調。

10日▶金主席、ラチラカ大統領単独会談。

▶金主席、新潟市代表団を接見。

▶最近、ハンガリーと政府間経済・科学技術協議委第3回議定書調印(於、ブダペスト)と報道。

▶マダガスカルと政府間文化協力協定書調印(於、平壤)。

▶マダガスカルと共同コミュニケ発表(於、平壤)。

▶全国的に田植え終了と報道。

11日▶朝ソ経済・科学技術協議委第13回会議議定書調印(於、モスクワ、会議は8日～11日)。

▶日本社会党青年活動家代表団平壤着。

▶金主席、朝鮮少年団創立30周年記念全国学生少年芸術サークル総合公演を観覧。

▶労働党代表団(団長、徐哲党中央委政治委員)モンゴル人民革命党第17回大会参加のため出発(～19日)。

12日▶金哲柱(金主席の弟)生誕60周年にさいし総連活動家代表団、在日朝鮮商工人代表団墓所に花輪を献呈。

13日▶総連活動家代表団、第25次在日同胞祖国訪問団歓迎平壤市大衆集会開催(於、2.8文化会館)。

14日▶「労働新聞」、金主席のパキスタン記者と行った談話(5月27日)を発表。

▶康良煜副主席にニジエール初代大使(アルジュマ・ティエラク)が信任状提出。

15日▶ビルマ政府貿易代表団(団長、フラ・エイ貿易相)平壤着(～26日)。

▶ブルガリア建設軍芸術団(団長エンチョ・ライコフスキ大佐、建設軍政治局第1副局長)一行(146名)平壤着(～29日)。

▶キューバ・サーカス団平壤着(～29日)。

17日▶ソ連共産党活動家代表団平壤着(～25日)。

▶朝鮮中央通信、スリランカと航空サービス協定調印と報道。

18日▶トーゴ政府民航代表団(サラミ・アムサ民間航空局長)平壤着(～25日)。

▶軍事停戦委第376回本会議開催。

▶バングラデシュ友好代表団平壤着。

19日▶康良煜副主席に、ポルトガル初代大使(マリオ・ビンソ・ネベス)信任状提出。

▶外交部スポークスマン、米韓合同軍事演習(浦項地区で6月28日～7月7日)を糾弾。

21日▶金主席、ポルトガル初代大使を接見。

▶金主席、ビルマ政府貿易代表団を接見。

22日▶デンマーク人民社会党代表団平壤着(～29日)。

23日▶各大衆団体、反米闘争月間にさいし共同声明発表。

▶人民軍協奏団(団長、金応道人民軍総政治局部長)中国へ出発(～8月15日帰国)。

▶「労働新聞」代表団(団長、鄭河天副主筆)ソ連に出发(～7月6日)。

24日▶朝鮮中央通信声明、北朝鮮ゲリラ侵入事件(韓国スパイ対策本部の20～21日発表)を「卑劣な政治的ねつ造であり醜い反共謀略劇である」と糾弾。

▶トーゴと政府間航空運輸協定締結(於、平壤)。

25日▶反米闘争デー、平壤市職盟員と千里馬騎手の弾劾集会、平壤市大衆集会開催。

▶日朝友好親善漁民代表団(団長、米田東吾日本社会党中央執行委員・教育宣伝局長)平壤着(～7月2日)。

26日▶「労働新聞」「勤労者」反米闘争デーにさいし共同論説「帝国主義の侵略的本性はかわらない」

▶在日朝鮮経済活動家代表団(団長、リュ・チャンギョ総連中央常任委経済局副局長)平壤着(～8月13日)。

27日▶金主席、ブルガリア建設軍芸術団公演を観覧。

▶金主席、ブルガリア建設軍芸術団を接見。

28日▶金主席、デンマーク人民社会党代表団を接見。

▶軍事停戦委第377回会議開催。

29日▶インドと航空サービス協定締結(於、ボンベイ)。

▶政府代表団(団長、李宗木外交部副部長)インドへ出発(インド、バングラデシュをへて7月15日帰国)。

30日▶金主席、在日朝鮮商工人代表団を接見。

▶人民経済大学創立30周年記念報告会開催。

▶非同盟諸国間の科学・技術協力に関する特別国際討論会開催(於、コロombo、～7月5日)。共和国代表団(団長、呉万興外交部参事)参加。

▶朝鮮中央通信、各地の家禽業戦士、上半期の卵、鶏肉生産目標を達成と報道。

7 月

1日▶金主席、バングラデシュ友好代表団を接見。

▶労働党代表団(団長、金敬連財務部長)イラクへ出発。

▶アラブ復興社会党代表团（団長、カリム・アル・ムーラ、イラク青年総連盟委員長）平壤着（～26日）。

▶インドと文化協定締結（於、ニューデリー）。

2日 ▶朝鮮中央通信、米韓海軍海兵隊合同機動訓練ビーコン・チェリー作戦を糾弾。

3日 ▶金主席、総連政治局副局長らを接見。

▶祖国戦線中央委、南北調節委連合声明、7.4南北共同声明発表4周年にさいして。

5日 ▶朝鮮中央通信、麦の大豊作を報道。

▶「労働新聞」7.4南北共同声明記念社説。

8日 ▶金主席、朴総理、朱徳死去にさいし中国の党・政府首脳に弔電を送る。

▶「労働新聞」編集局論説「白日下にさらけだされた南朝鮮における米帝国主義の細菌兵器試験蛮行を厳しく糾弾する」

▶非同盟国通信社連合の運営に関する非同盟諸国会議開催（於、ニューデリー、～13日）、共和国より代表团（団長、金成傑）参加。

9日 ▶朝鮮中央通信、劇映画撮影所で「ある家庭で」「新しい職場」を制作と報道。

10日 ▶ベニン人民共和国（旧ダオメー）マチュー・ケレク大統領、人民革命党中央委員長ら党・政府代表团平壤着（～15日）、金主席ら空港に出迎え。金主席と会談、歓迎宴——ベニンは75年10月6日に韓国とは国交断絶した。

11日 ▶金主席、ケレク大統領と会談。金東奎、朴成哲、許淡、孔鎮泰ら同席。

▶キューバ人民との連帯月間開幕（～8月10日）。

▶在日朝鮮経済活動家代表团歓迎平壤市民集会開催（於、2.8文化会館）。

12日 ▶外交部スポークスマン声明、米第8戦術戦闘飛行団の南朝鮮搬入を糾弾、記者会見。

13日 ▶金主席、ケレク大統領と単独会見。

▶ビルマ農業代表团（団長、ウ・ティンハン農林省次官）平壤着（～28日）。

14日 ▶ケレク大統領歓迎平壤市民大会開催、金主席ら参席。

15日 ▶ベニンと貿易協定、科学技術協力協定、経済・技術協力に関する合意書調印（於、平壤）。

▶朝ベニン共同コミュニケ発表（於、平壤）。

16日 ▶バングラデシュと航空運輸に関する合意書調印（於、ダッカ）。

▶バングラデシュ農業代表团（団長、A. K. マフサン計画委員会委員）平壤着（～24日）。

17日 ▶「労働新聞」論評「沖縄から B-52 機を直ちに撤収せよ」

▶アラブ復興社会党代表团歓迎平壤市大衆集会開催（於、人民文化宮殿）。

19日 ▶「労働新聞」論説「自主性を擁護することは非同盟運動の本質から生ずる必須的な要求」

20日 ▶金主席、アラブ復興社会党代表团を接見、楊亨燮、金英南同席。

▶許淡副総理・外交部長、ベトナム大使と会見。ベトナム側提議によりベトナム社会主義共和国との外交関係設定日をベトナム民主共和国との外交関係樹立日（1950年1月31日）にすることに賛同。

21日 ▶祖国統一民主主義戦線結成30周年記念報告会開催（於、人民文化宮殿）、金主席祝賀文を金東奎が伝達、徐哲報告。「南朝鮮の各政党・大衆団体と各階層人民におくる手紙」採択（大民族会議の招集を提議、実務者会議の早急な開催と共同準備委員会の構成をよびかける）。

▶共和国軍事代表团（張正桓中將ら）とルワンダ軍事代表代表团（団長、リュサティラ・レオニダス少佐・全国革命発展運動中央委員、國務省事務局長）の会談開催。

▶「普天堡のろし賞」体育競技大会開幕式（於、平壤）。

22日 ▶駐アルジェリア大使に金熙俊を任命する政令発表。

23日 ▶金主席、ベトナム大使（レ・チュン・ナム）を接見。統一社会主義国家建国に祝意をのべる。

▶金主席、マダガスカル「チュチュ思想に関する国際科学討論会」準備委員長、同国大統領官房室思想担当公使アンドリアナラヒンザカを接見。

▶政府貿易代表团（団長、金錫鎮貿易部副部長）ダマスкас国際展参加のため出発（～8月5日帰国）。

▶金主席に、ラオス新任大使（タボン・シジャレン）信任状提出。

24日 ▶呉振宇人民武力部長、ルワンダ軍事代表团と会見。

25日 ▶「労働新聞」論説「戦争の道につき進むアメリカ帝国主義の危険な策動」——タイ駐屯米第8戦術戦闘飛行団と最新型マッドアイ対空ミサイルの南朝鮮搬入、烏山基地駐屯米324空軍師団本部のリョンサン基地への移動を、「アメリカ帝国主義者が朝鮮で是が非でも新たな侵略戦争を起こそうとする凶悪な下心をそのままさらけ出したもの」と糾弾。

26日 ▶金主席、ルワンダ軍事代表团を接見。呉振宇、張正桓同席。

▶キューバ人民の武装蜂起23周年平壤市記念集会開催（於、人民文化宮殿）。

▶「労働新聞」論評「日ましに無謀さをます米帝の危険な戦争騒動」——わが国には常時戦争勃発の危険がつく

りだされていると指摘。

27日 ▶康良煜副主席、ビルマ農業代表団と会見。

▶「朝鮮中央通信、朴一味の非同盟諸国に対する「外交使節団」派遣外交攻勢を非難——「朴正熙かいらい一味は醜い事大売国奴であり、非同盟諸国・新興勢力諸国人民をはじめ世界の進歩的人民の前にぬぐい難い罪惡を犯してきた悪党であり、民族の独立と社会的進歩をめざす人民の共通の敵である」

▶「労働新聞」社説「アメリカ帝国主義の侵略と戦争挑発の策動を粉碎し祖国の自主的平和統一をかちとろう」（祖国解放戦争勝利23周年を迎えて）。

28日 ▶ユーゴスラビア共産主義者同盟休養団（ユレ・ビリッチ中央委幹部会員、執行委書記、ボヨ・スルゼンチッチ中央委幹部会員、執行委書記とその家族）平壤着。

▶金東奎副主席、ブルガリア共産党中央委対外政策・国際連絡部代表団（団長、ジミトル・スタンシエフ部長）と会見。

▶「労働新聞」論説「経済技術的協力は非同盟諸国の自主的発展のための重要な方途」

29日 ▶男女平等権法令30周年記念報告会開催（於、人民文化宮殿）、金聖愛女性同盟中央委員長報告。

▶金主席、朴総理、中国河北省大地震にさいし中国党・政府指導者に慰問電を送る。

▶朝鮮中央通信論説「新たな朝鮮侵略戦争を挑発しようとする米帝の犯罪者を策動」

30日 ▶第4回アジア・アフリカ人民連帯機構（AAPS）常務委員会（於、コンゴ人民共和国ブラザビル、7月27～30日）「朝鮮に関する決議」採択。

31日 ▶日朝友好促進兵庫県議会議員連盟代表団（～6日）、大垣市議会議員連盟代表団平壤着。

▶在日朝鮮教育活動家代表団平壤着。

▶康盤石女史逝去44周年にさいし在日朝鮮経済活動代表団墓所と銅像と花輪献上。

8 月

1日 ▶「労働新聞」祝辞「無謀な段階に入った米帝の新戦争挑発策動を告発する」

2日 ▶金主席、ソマリア新任大使（モハメド・イスMAIL・カヒン）を接見。

▶「労働新聞」論説「米日軍事結託の強化と朝鮮戦争挑発策動」

3日 ▶朝鮮中央通信、記録映画撮影所が先ごろ「朝鮮はひとつ」と「第3回アジア卓球選手権大会」を制作したと報道。

▶キューバ共産党活動家代表団（レネ、カステルヤノ

ス・オチャア共産党学校副校長）平壤着。

4日 ▶「労働新聞」論説「三大革命赤旗爭取運動は革命発展の新たな段階で展開される高い形態の大衆的文化改造運動」

5日 ▶共和国政府声明、「米帝はわが国に反対する新戦争挑発策動とすべての侵略行為を直ちに中止し、南朝鮮に搬入した大量殺りく兵器と軍事装備を即時撤収すべきである」——緊張状態は、今は、かつてなく先鋭化した段階に達しており、朝鮮人民の前には任意の時刻に戦争が起こりうる危急な情勢がつくりだされている。

▶政府覚書「すべての事実は朝鮮での戦争の危険が他ならぬ南からの北侵策動によってつくりだされていることを示している」

▶軍事停戦委第378回会議開催。

▶金主席の8.6演説発表5周年記念平壤市報告会開催（於、2.8文化会館）楊亨燮記念報告。

▶許淡副総理・外交部長、インドシナ3国をへて非同盟諸国首脳会議参加のため出発。ラオス訪問（～6日）。

▶祖国統一民主主義戦線中央委声明「南朝鮮かいらい一味は逮捕拘禁した民主人士を無条件釈放せよ」

▶金主席、ユーゴスラビア共産主義者同盟中央委書記らを接見。

6日 ▶金主席夫妻、マリ共和国大統領の子女を接見。

▶許淡外交部長、主席特使としてベトナム訪問（～7日）。

7日 ▶許淡特使カンボジア訪問（～9日）。

▶康良煜副主席に民主カンボジア新任大使（シム・ソン）信任状提出。

▶「労働新聞」社説「朝鮮で新たな侵略戦争の火をつけようとする米帝の無謀な策動を断固粉碎しよう」

8日 ▶駐ソ大使に金在奉、駐カボベルデ諸島大使にリヨン・ハクチョルを任命する政令発表。

9日 ▶ボツワナ共和国セレシエ・カーマ大統領夫妻平壤着（～13日）、金主席夫妻空港出迎え。同夜招宴。

▶許淡副総理兼外交部長コロombo着、各国外相と会見開始。

10日 ▶社会主義エチオピア政府民間航空局代表団（団長、ギルマウ・インジエフ民間航空局長）平壤着（～17日）。

11日 ▶金主席、カーマ大統領と単独会談。

▶「労働新聞」論説「非同盟運動は団結と協力によってのみ反帝共同偉業の勝利をおさめることができる」

12日 ▶金主席、カンボジア新任大使を接見。

▶カーマ大統領歓迎平壤市民大会開催（於、平壤市体育館）。

▶朝鮮中央通信、記録映画撮影所が「ワンジェ山革命

史跡地」を制作と報道。

14日 ▶駐チュニジア大使に金熙俊を任命する政令発表。

▶共和国代表团（団長、朴成哲政務院総理）、第5回非同盟国諸国首脳会議参加のためスリランカへ出発（～21日）。

▶「労働新聞」社説「朝鮮人民の正義の偉業にたいする国際連帯の壮嚴な示威」（6.25～7.27反米共同闘争月間の成功裏実行にさいし）。

15日 ▶金主席・朴総理、8.15祝日31周年にさいしソ連の党・政府指導者と祝電交換。

▶朴成哲総理、チトー大統領と会見（於、コロombo）。

16日 ▶第5回非同盟諸国首脳会議開幕（於、コロombo、～19日）。

▶エチオピア臨時軍事政府と航空運輸協定締結（於、平壤）。

▶「労働新聞」社説、「第5回非同盟諸国首脳会議を熱烈に祝う」

▶第31回国連総会に「朝鮮で戦争の危険をとりのぞき、平和を維持強化し、朝鮮の自主的平和統一を促進するために」という議案とそれに伴う決議案を20カ国が提出、さらに4カ国が賛成参加（20カ国＝アルジェリア、トーゴ、ラオス、イラク、マリ、マダガスカル、ギニア、コンゴ、中国、ソ連、チェコスロバキア、ブルガリア、ルーマニア、民主ドイツ、ポーランド、ハンガリー、モンゴル、白ロシア、ウクライナ、ブルンジ、4カ国＝ザンビア、マルタ、民主イエメン、ソマリア）。

17日 ▶朝鮮中央通信、芸術映画撮映所が劇映画「大地に根をおろす」を制作と報道——農村でチュチェ農法を開花させる新しいタイプのインテリ、青年科学者の典型を形象代。

▶朴総理、非同盟諸国首脳会議第2日目に演説。

18日 ▶午前10時45分ころ、板門店で立木伐採をめぐる衝突事件発生。

19日 ▶人民軍最高司令部報道、最高司令官は人民軍全部隊と労働赤衛隊、赤い青年近衛隊の全隊員に戦闘態勢に入るよう命令を下した。

▶朝鮮中央通信社声明、板門店事件は「アメリカ帝国主義者と南朝鮮がいらい一味がわが方に対して野獣のように働いた挑発的蛮行」であり、「情勢を戦争瀬戸際へと導くため、故意に仕組んだ計画的な犯罪行為であり、朝鮮人民と世界平和愛好人民にたいする許しえない挑発行為である」と糾弾。

▶軍事停戦委第379回会議。

▶第27次在日同胞祖国訪問団平壤着。

▶金主席、朴総理、四川省地震にさいし中国の党・政

府指導者に見舞電を送る。

▶祖国統一民主主義戦線中央委声明、日本でひらかれた「韓国問題緊急国際会議」についてその成果を祝い、決議を支持。

▶非同盟諸国首脳会議閉幕、「朝鮮問題に関する決議」採択。

20日 ▶第18回南北赤十字実務会議開催（於、板門店）共和国側は南側が新戦争の危険を防止する措置をとらなければならないと主張。

21日 ▶フォード大統領指揮による板門店立木伐採作戦実施、米海軍機動艦隊朝鮮水域に出動。

▶「労働新聞」社説「全人民が団結して社会主義祖国を守ろう」

22日 ▶金主席、キューバのカストロ首相の兄ラモン・カストロを接見。

▶駐マダガスカル大使にソ・ジンヨンを任命する政令公布。

23日 ▶ラモン・カストロ歓迎平壤市大衆集会開催（於、中央労働者会館）。

24日 ▶「労働新聞」社説「非同盟運動の発展で新たな前進」

▶セーシェル共和国と大使館外交関係樹立に関する共同コミュニケ。

25日 ▶金主席、カンボジア女性同盟代表団を接見。

▶軍事停戦委第380回会議開催、朝中側首席委員、新提案——共同警備区域内の現行の安全保障秩序では、両側軍事要員間のさまざまな衝突は避け難いとして、「双方警備要員を、軍事境界線に間において隔離」することを提案。

▶外交部報道局、軍事停戦委第380回会議に関連し記者会見。

26日 ▶朝鮮中央通信報道、国連総会提出決議案の共同視察団31カ国となる（17日にキューバ、赤道ギニア、シリア、ギニア・ビサウ、19日にタンザニア、リビア、民主カンボジアが参加）。

▶朝鮮中央通信、人民軍池京洙中將が25日59歳で死去と発表。

27日 ▶朝鮮中央通信論評「事件を挑発して、他人に責任を転嫁し戦争を起こすのは米帝の常套手段」

▶朝鮮中央通信社とスウェーデン新聞合同通信社間に通信報道交換・相互協力協定締結（於、ストックホルム）。

28日 ▶軍事停戦委第381回会議開催、米側・朝中側の提案に同意。

▶ソ連「イズベスチヤ」紙論説「朝鮮半島に平和と安全を」

29日 ▶平壤各紙・板門店共同警備区域の警備秩序変更提案を支持。

▶朝鮮ガイアナ友好協会結成集会開催（於、チョンリマ文化会館）、委員長に金寛燮対外文化連絡委員長を選出。

30日 ▶午前10時、東海領海で正体不明の船舶をだ捕。

9 月

1日 ▶新学年（9月1日）から各地に11の工場大学、25の工場高等技術学校を建設・開校する。

2日 ▶共和国赤十字中央委、30日にだ捕した正体不明船舶に関し、南朝鮮赤十字社に通知文——南朝鮮漁船であるならば、かれらを早急に送還するよう協力する用意のあること。

▶「労働新聞」社説「当面の情勢の要求にそくして社会主義建設で一大革命的高揚を起こそう」——すべての活動家と勤労者は、こんにちの緊張した情勢の下でさ細な不平や不満も徹底的になくし、いかなることがあっても党が指示した革命課題を無条件にうけとめて一瞬の遅滞も、一寸のずれもなく徹底的に貫徹する革命的気風と鋼鉄のごとき規律を確立すべきである。

3日 ▶朝鮮民主法律家協会声明、金大中ら民主救国宣言事件問題にたいするファッショ的殺人裁判を糾弾。

▶朝鮮中央通信、清津市の灌漑建設者が1カ所15ヘクタールの野菜畑をいっぺんにうるおす大型回転式散水器を製作と報道。

4日 ▶国連総会提出決議案共同発起国33カ国に増加と発表（8月27日ルワンダ、8月31日ベニンが参加）。

▶「民主朝鮮」紙編集局論説、「民主救国」事件裁判に関し、朴一味は「古今東西にない凶悪な殺人者であり、ヒトラーをしのぐファッショ暴君である」と糾弾。

5日 ▶「労働新聞」論評「南朝鮮かいらいは虐殺者の集団である」

▶祖国統一民主主義戦線中央委と祖国平和統一委連合会議開催（於、人民文化宮殿）——許貞淑祖国戦線中央委書記長報告、「世界各国の民主団体に送る手紙」を採択。

6日 ▶各大衆団体連合声明、朴一味の民主人士弾圧を糾弾。

▶第446回軍停委秘書長会議で板門店共同警備区域の秩序変更案にたいする最終合意。

▶中央人民委、両江道厚昌郡人民病院を「金亨稷人民病院」に改称する政令発表（金亨稷は金主席の父親）。

8日 ▶共和国創建28周年記念中央報告大会開催（於、2.8文化会館）。金一、金東奎、康良煜、朴成哲、崔賢、

呉振宇、徐哲、李勇武、玄武光、呉白竜、韓益洙、金英南、金鉄乃、姜成山、許淡、孔鎮泰、尹基福、李鍾玉、黄長燁ら参加。金東奎副主席記念報告。

9日 ▶共和国創建28周年慶祝宴会開催（於、万寿台議事堂）、朴成哲総理演説。

▶金主席、毛沢東の死去にさいし中国共産党中央委員会に弔電。

▶中国人民日報社説「朝鮮人民は勝利のうちに前進している」

10日 ▶金主席、中国大使館を弔問。金東奎、康良煜、朴成哲、呉振宇、徐哲、李根模、延亨黙、李勇武、全文燮、玄武光、呉白竜、韓益洙、金英南、金鉄万、姜成山、許淡、孔鎮泰、尹基福、李鍾玉、金煥、黄長燁も弔問。

・労働党中委、共和国中央人民委共同決定採択、①9月10～18日を全国哀悼期間とする、②この期間に全機関、工場、企業所、学校、街頭、その他農村の各家庭で弔旗をかかげる、③葬儀の日9月18日午後4時（北京時間午後3時）全機関、部隊、工場、企業所、学校、街頭、農村で活動を中断し難い人を除外し3分間起立し哀悼を表する、汽車、船舶、工場等全単位で哀悼を表し3分間汽笛を鳴らす、同日全国的にすべての歌舞をやめ、哀悼の放送を行う。

▶「労働新聞」社説「中国人民の偉大な首領毛沢東同志の死去に深甚な哀悼の意を表する」、平壤各紙哀悼社説を掲載。

▶気象水文局代表団（団長、宋寛祖局長）第6回社会主義気象水文局長会議に参加するためブルガリアへ出発。

▶金主席、イラク新任大使（ファトヒ・フサイン・アリ）を接見。

▶「労働新聞」評論員論評「わが方の発起による秩序変更は挑発防止の正当な措置である」——板門店事件は「フォードが地に落ちた威信をたて直し、今アメリカで行われている大統領選挙で有利な立場を占めるため、計画的に起こした謀略事件である」

13日 ▶朝鮮中央通信報道、国連総会提出決議案の共同提案国35カ国に増加（9月8日エジプト、10日モザンビークが参加）。

▶金主席、毛沢東霊前に花輪を送る。

▶東海で操業中の日本漁船11隻、台風を避けるため緊急保護をもとめ、共和国の港に入港。安全地帯で保護。

▶ハンガリー軍事代表団（団長、チエミ・カロイ中将、国防省國務書記）平壤着（～12日）。

▶呉振宇人民武力部長、ハンガリー軍事代表団と会見。

15日 ▶金主席、平安南道内協同農場、工場、企業所を現地指導、農業部門活動家協議会を招集（～20日）。

▶「労働新聞」論説「国家がすべての勤労者の生活を全的に責任もって保障するわが国の社会主義制度」——わが国で人口死亡率が半減し、平均寿命は30年ものびた。

▶共和国軍事代表团とハンガリー軍事代表团会談。金鉄万上将、張正桓、趙明祿中將ら参加。

16日 ▶11隻の日本漁船、全隻無事に日本へ向けて出港。

▶板門店共同警備区域内に標識を立て、相手側管轄区域にある警備要員と警備哨所その他の施設物を撤去する作業終了、秩序変更発動。

17日 ▶朝鮮共同通信、各地の建設進行を報道、順川セメント工場、青年化学総合工場、青川江火力発電所、南清津など大記念碑の創造物続々建設中。

18日 ▶朝鮮中央通信、劇映画撮影所が劇映画「日ざしを乗せて」を制作と報道（農村バス化をえがく）。

▶政府代表团（団長、李昌善文化芸術部長）「チュチュエ思想に関する国際科学討論会」参加のためマダガスカルへ出発（～10月7日帰国）。

19日 ▶「労働新聞」評論員論評「『力』の信奉者の空威張り」——フォードとその一味が、板門店事件の真相を歪め、アメリカがこの事件で「力」と「能力」を誇示したとの世論を流布させている。

20日 ▶崔康健副主席の死去についての訃告発表（19日、76歳で死去）。国葬とし、葬儀委員会構成。

▶金主席、崔康健の柩に哀悼の意を表示、党政権機関、社会団体も。

▶朴総理、ハンガリー軍事代表团と会見。

▶華国鋒中国共産党第一副主席・首相から崔康健死去を哀悼する弔電。

21日 ▶国連駐在常任オブザーバー代表部権敏俊代表、議案「朝鮮における戦争の危険除去、平和の維持強化、朝鮮の自主的平和統一の促進」とそれに伴う決議案を撤回したことと関連し声明発表。

▶政府貿易代表团（団長、桂応泰貿易部長）ポーランドへ出発。

22日 ▶外交部スポークスマン声明、ベトナムに対する米帝の敵視政策を糾弾。

▶崔康健副主席葬儀。金東奎、康良煜、朴成哲、呉振宇ら参列。

23日 ▶許淡副総理兼外交部長、中国新任大使（呂志先）と会見。

▶中国の党・政府指導者（張春橋、陳錫聯、呉徳、耿飈、喬冠華、張才千ら）中国駐在朝鮮大使館を訪問し弔意を表する。

24日 ▶金主席、黄海北道の協同農場、工場を現地指導（9月27、28日と3日間）、道内農業部門活動者会議、招集。

▶ソ連共産党中央委・最高会議幹部会から崔庸健死去にさいし弔電。

▶赤十字会中央委、領海不法侵入南朝鮮船舶に関し、南朝鮮赤十字社に通知文を送る。

▶平壤各紙、LNG ワイロ事件に介入して莫大な仲介料をせしめた朴一味の醜い正体を暴露し糾弾。

25日 ▶朝鮮中央通信社声明、9月23日日本反動が共和国貿易船スグン号に重大な挑発行為を働いたことを糾弾。

▶平壤各紙、最近日本で KCIA が総連現職幹部魚塘時代社副社長を拉致、利用しようとした行為を糾弾。

▶金主席、黄海南道協同農場、果樹農園を現地指導（～27日）、果樹部門活動者会議を招集。

▶ベトナムと1976～77年度保健協力計画調印（於、ハノイ）。

26日 ▶中国「人民日報」、金主席の平安南道現地指導を報道。

28日 ▶在日本朝鮮記者代表团（団長、朴トンチュン在日本朝鮮人言論人協会会長）平壤着。

▶朝鮮中央通信、共和国創建以来かつてなかった大豊作を迎えたと報道。

▶「チュチュエ思想に関する国際シンポジウム」マダガスカル首都タナナリブで開幕（～30日）。

29日 ▶金主席に、中国新任大使（呂志先）信任状提出。林春秋、許淡ら参加。

30日 ▶金主席、在日朝鮮人中央教育会に教育援助費、奨学金を送る（第63回目、6億3320万4000円、累計219億7480万9533円）。

▶金主席、朴総理、中国創建27周年に当り華国鋒党第一主席・総理、呉徳全人代常務委副委員長に祝電。

▶南朝鮮人民抗争30周年記念平壤市報告開催（於、牡丹峰劇場）、祖国統一戦線許貞淑書記局長報告。

▶「チュチュエ思想に関する国際科学シンポジウム」宣言採択、「共通の目的と理想憲法のためチュチュエ思想をさらに深く研究体得しチュチュエ思想を広く解説宣伝することが必要であると認める」

▶ジュネーブで朝鮮問題国際記者会見開催。スイス著名人士の共同主催。日本人記者太刀川演説。

10月

2日 ▶東ドイツ軍事代表团（団長、ハインツ・ホフマン大将、社会主義統一党中央委政治局長、国防相）平壤

着（～7日）。

3日 ▶共和国軍事代表団、東ドイツ軍事代表団と会谈、吳振宇人民武力部長、金鉄万上將、張正桓、趙明祿、方鉄甲、尹致洛各中將ら参加。

▶第177次帰国船万景峰号清津着。

▶学生節14周年記念公演報告会（於、2.8文化会館）、池在龍杜勞青中央委員長報告。

▶体育種目別選手権大会各地で開催（～17日）。

4日 ▶朝鮮中央通信、例年になく豊作にわきたつ農村について報道。

▶金東奎副主席にモンゴル新任大使（バダムタルイン・バルド）信任状提出。林春秋ら同席。

5日 ▶金主席、東ドイツ軍事代表団を接見。

▶カンボジア政府経済代表団平壤着（～12日）。

▶ベニン政府農業代表団平壤着（～12日）。

▶東ドイツ軍事代表団歓迎平壤市・同駐屯部隊大衆集会開催（於、2.8文化会館）。

6日 ▶ラテンアメリカ親善訪問の対外文化連絡委代表団（団長、黄乃翹副委員長）一行、ガイアナから帰国の途中飛行機事故で犠牲となる。

8日 ▶金主席、カンボジア政府経済代表団を接見。孔鎮泰、鄭松南ら同席。

▶「南朝鮮における民主主義と人権のための国際法律家委員会」第1回会議（於、パリ）、朴正熙一味に対する起訴状を提起。

9日 ▶朝鮮労働党創立31周年記念中央講演報告会開催（於、人民文化宮殿）、康良煜ら参加、楊亨燮講演報告。

▶軍事停戦案第382回会議開催。ハン・ジュギョン首席委員（少将）8月17日以来の南朝鮮からいらいの軍事挑発に強く抗議。

▶金主席、ベニン政府農業代表団を接見。

11日 ▶朝鮮労働党中央委第5期第12回総会開幕（～14日）、議題①1976年度営農事業の総括について（各道党委常任秘書報告）、②わが党が提示した自然改造5大方針を徹底的に貫徹して穀物千万トン生産高地をくりあげ占領することについて（徐寛熙農業委員長報告）。

12日 ▶康良煜副主席、帰国するイラン大使と会見。

13日 ▶朝鮮中央通信報道、南朝鮮船舶シンジン3号乗務員返送と関連して。

▶「労働新聞」論説「『維新体制』下の南朝鮮は民主主義の墓である」

▶「統一新報」社説、「総連にたいする内外反動の破壊謀略活動を粉碎しよう」——魚塘事件を糾弾、「日本当局はこれ以上、人間の屑朴正熙からいらい一味を庇護してはならず」「すべての在日同胞は『朝民連』とかいらい特務の甘言に騙されてはならず」等と警告。

14日 ▶打倒帝国主義同盟結成50周年記念中央研究討論会開催（於、人民文化宮殿）。

▶モンゴル民間航空総局代表団（団長、ハル・ジャン総局財政務長）平壤着（～29日）。

15日 ▶朝鮮中央通信、800万トン以上の穀物高地を占領と報道。

▶「労働新聞」論評「南朝鮮農業の凶作はかいらいの悪政の産物」

▶第2次中国親善参観団（団長、ジャナピル新疆ウイグル自治区常務委員、革命委副主任）平壤着（～11月5日）。

16日 ▶打倒帝国主義同盟結成50周年記念中央報告大会開催（於、2.8文化会館）、金一、朴成哲、康良煜、金東奎、吳振宇、徐哲、林春秋、楊亨燮、吳白竜、李根模、延亨黙、韓益殊、李勇武、玄武光、金英南、鄭準基、金鉄万、姜成山、許淡、孔鎮泰、李鍾玉、金煥、尹基福、黄長燁ら参加。朴成哲記念報告。

▶政府文化代表団（団長、李昌善文化芸術部長）ブルガリアへ出発（～24日帰国）。

17日 ▶「労働新聞」社説「偉大な首領が切り開いたチュチェの革命偉業をあくまで完成しよう」、平壤各紙社説で打倒帝国主義同盟結成50周年を総念。

▶「労働新聞」論評、14～15日のアメリカ高速度高空偵察機のスパイ行為を糾弾。

▶統一革命党中央委、打倒帝国主義同盟結成50周年にさいし金主席に祝賀文——金日成主義を最大限に讃美。

▶打倒帝国主義同盟50周年慶祝平壤市動労者の夜会開催（於、金日成広場、平壤体育館、2.8文化会館前広場）1万5000余人参集。大群衆舞踊をくりひろげる。

18日 ▶祖国平和統一委声明、南朝鮮に米陸軍第7心理作戦部隊謀略宣伝機関である陸軍印刷出版センターが移動したことを糾弾。

19日 ▶朝鮮大学校代表団（団長、ナム・シウ副学長）平壤着（～12月7日）。

▶朝ソ漁業共同委ソ連代表団（団長、ア・エン・クリチェンコ漁業省次官）、同委第7回会議参加のため平壤着（～11月2日）。

▶軍事代表団（団長、張正桓中將、人民武力部副部長）ルワンダへ出発（～11月9日帰国）。

▶「労働新聞」社説「歴史に類例のない大豊作、わが党農業政策の偉大な勝利」

▶社会主義国唯一航空運賃率協定参加民間航空機関代表者第11回定期会議開催（於、平壤、～23日）。

20日 ▶墜死した対外文化連絡委代表団一行の追悼集会と葬儀執行。

▶「労働新聞」論評、南朝鮮での米軍武力増強（A C

130 攻撃機, F15 戦闘機の搬入など)を糾弾。

21日 ▶駐ユーゴスラビア大使に鄭光淳を任命する政令発表。

▶職総中央委, 10.21 国際反戦デーにさいし東京で行なわれた中央集會に連帶の電報。

▶シリアと政府間1977年度商品流通に関する議定書調印 (於, ダマスカス)。

22日 ▶「労働新聞」社説「全党, 全国, 全人民が決起して偉大な首相が提示した自然改造5大方針を徹底的に貫徹しよう」

▶金主師, 両江道新坡郡プンヤン高等中学生と教職員を接見 (忠誠の贈物を持参した)。

▶日本社会活動家小田実 (朝鮮の自主的平和統一支持日本委代表委員) 平壤着 (〜13日)。

▶平壤市勤労者決起集會開催 (5万余人), 自然改造5大方針貫徹闘争で全国の先頭に立つことを決意。連日各地で同様集會開催。

23日 ▶金主席, モンゴル新任大使 (バダムタリン・バルド) を接見。

▶金主席, 中国人民志願軍参戦26周年にさいし, 毛岸英の墓, 人民志願軍烈士墓に花輪を送る。進呈式に楊亨燮ら参加。

24日 ▶朝鮮労働党, ルワンダ全国革命發展運動代表団と会談 (於, 平壤), 楊亨燮ら参加。

▶金主席, 中国華国鋒主席に祝電 (党主席, 党中央軍事委主席への選出に関連)。

▶金主席に, ナイジェリア初代大使 (J. タンコ・ユスフ) 信任状提出。

▶金日成総合大学に二重千里馬称号を授与。

25日 ▶金主席, 江原道内人民經濟部門を現地指導 (〜11月6日)。

▶「労働新聞」社説「血潮で結ばれた不滅の友好団結」中国人民志願軍朝鮮戦線参戦26周年を記念。

▶アルジェリアと政府間1977〜78年度文化・科学交流計画書を調印 (於, 平壤)。

▶「勤労者」創刊30周年記念報告会開催 (於, 2.8 文化会館), 董載鉉責任主筆報告。

▶中国人民軍参戦26周年記念宴會開 (於, 玉琉館, 人民武力部主催), 吳根宇, 楊亨燮, 鄭準基, 金鉄万参加。金鉄万が演説。

▶朝鮮中央通信, 北京の華国鋒就任祝賀集會を報道, 「4人組」陰謀粉碎の偉大な勝利祝賀の状況を伝える。

26日 ▶平壤各紙, 朴一味の米帝への贈賄行為を糾弾, 「労働新聞」論説「滅亡にひんした人間の肩の吐き気をもよおす行為」。

▶バングラデシュと文化協定締結 (於, ダッカ)。

▶労働党代表団 (団長, 金貴南中央委候補, 「労働新聞」責任主筆) ポルトガルへ出発 (〜11月23日)。

27日 ▶駐ルワンダ大使にリ・ヒョンソンを任命する政令発表。

▶第6回世界青年音楽コンクール (於, ベオグラード, 10月19〜27日) で, 共和国のバイオリニスト金成鎬, 第1位を獲得。

28日 ▶平壤各紙, 日本小坂外相の不純な言動 (カナダ首相との会談における南北朝鮮の国連同時加盟よびかねなど) を糾弾。

▶「勤労者」誌第10号, 論説「自己の強固な原料基地を築くことは, チュチェ工業建設の根本的な方途」

▶労働党代表団 (団長, 徐哲中央政治委) アルバニア労働党第71回大会参加のため出発 (〜11月11日帰国)。

▶労働党活動家代表団, ソ連訪問に出発 (〜11月11日帰国)。

▶労働党活動家代表団, ハンガリー, ルーマニア訪問に出発 (〜11月23日帰国)。

▶社会主義国唯一航空旅客運賃率, 航空貨物運賃率に関する議定書調印 (於, 平壤), 朝鮮, 東ドイツ, ルーマニア, ハンガリー, ベトナム, チェコスロバキア, ポーランド, ソ連, モンゴル, ブルガリア参加。

29日 ▶各協同農場で決算分配開始と報道。

▶中央銀行創立30周年記念報告会開催 (於, 牡丹峰劇場), 辺承禹中央銀行総裁報告。

11月

2日 ▶金主席, ルワンダ全国革命發展運動代表団を接見。

▶平壤各紙, 朝鮮労働党第5回大会6周年を記念し社説掲載。

▶チャド政府代表団 (団長, ワダル・アブデルカデル・カムング外相) 平壤着 (〜6日)。

3日 ▶共和国政府代表団, チャド政府代表団と会談。許淡副総理・外交部長ら参加。

▶「新一新報」, 論評, 朴一味の唱える「不可侵条約」の反動性を暴露, 糾弾。

4日 ▶金主席, チャド政府代表団を接見。

▶クムソン政治大学 (青年幹部養成機関) 創立30周年記念報告会開催。

5日 ▶朝鮮の自主的平和統一支持日本委代表団 (団長, 岩井章事務局長) 平壤着 (〜12日)。

▶城戸又一創価大学教授平壤着 (〜16日)。

▶政府貿易代表団 (団長, 李泰白貿易部副部長) モザンビーク訪問に出発 (〜12月17日帰国)。

▶ヨルダン王国政府經濟・貿易代表団 (団長, ハシェ

ム・ダバス工業・貿易省次官)平壤着(～12日)。

6日 ▶金主席,咸鏡南道内の人民経済部門を現地指導(～19日)。

▶「労働新聞」論評,日本の「新防衛計画大綱」の侵略的本質を暴露。

▶チャドと政府間経済・技術協力に関する合意書調印(於,平壤)。

▶フランス共産党代表団(団長,ギー・エルミエ中央政治局委員)平壤着(～13日)。

8日 ▶労働党代表団とフランス共産党代表団間の会談,楊亨燮中央政治委員・秘書ら参加。

9日 ▶金主席,小田実を接見。

10日 ▶金主席,岩井章一行を接見。

11日 ▶「労働新聞」論説,「三大革命赤旗争取運動をいっそう力強く展開しよう」

▶「労働新聞」論評「日増しに露骨化する日本反動の朝鮮侵略野望」——西山駐韓大使の帰国言動,小坂発言などを糾弾。

▶統一革命党代表チャン・ソクギョ記者会見(於,人民文化宮殿),“万古の逆賊朴正熙からいらい一味は不正腐敗の元凶であり,天下にまたとない事大売国奴である”

12日 ▶金主席,フランス共産党代表団を接見。楊亨燮ら同席。

▶「労働新聞」論評,日本の小坂,東郷発言を暴露,糾弾。

▶共和国政府経済・貿易代表団とヨルダン政府経済・貿易代表団間の合意書調印(於,平壤)。

▶社労青中央委声明,朴一味の学園弾圧暴行を糾弾。

13日 ▶金主席,城戸又一を接見。

▶「労働新聞」社説「党員と勤労者を帝国主義と階級の敵にたいする非妥協的な闘争精神で徹底的に武装させよう」

14日 ▶「労働新聞」論評「日本反動の侵略的正体はひきつづき暴かれている」——日本丸山防衛次官の発言を糾弾。

▶祖国平和統一委声明,朴一味の対米贈賄行為を糾弾。

▶金主席指導下,東海地区水産部門熱誠者会議開催(於,咸興,～15日)。

15日 ▶イエメンと政府間航空運輸に関する協定調印(於,平壤)。

▶朝鮮民主法律家協会声明,朴一味の学園弾圧を糾弾。

▶ベトナムと政府間1976～77年度文化交流計画書調印(於,ハノイ)。

17日 ▶ユネスコ駐在常設代表部をバ리에設置すること

を決定と同機構書記局に通知(同日設置)。

18日 ▶モンゴルと政府間1976～77年度文化交流計画書調印(於,ウランバートル)。

19日 ▶このほど朝鮮バングラデシュ友好協会結成と報道,委員長に金二勲農勸盟中央委員長を選出。

▶在日本朝鮮経済活動家代表団(団長,洪ボンス総連副議長)平壤着(～12月14日)。

▶「労働新聞」社説「南朝鮮からの米軍撤退に関する国連の決議は遅滞なく履行されるべきである」

21日 ▶「労働新聞」論説「革命教育,思想教育を強化することは,勤労者のなかで革命的世界観を確立する重要な保証」

22日 ▶最近,職総中委・農勸盟中委・社労青中委・女盟中委総がひらかれ,自然改造5大方針貫徹の聖なる闘争に盟員らを力強く組織動員すること決定と報道。

23日 ▶統一革命党中央委「賄賂の親玉朴正熙逆賊の不正腐敗白書」を発表。

24日 ▶最近行なわれた第22回ユーゴスラビア国際卓球選手権大会個人戦女子シングルスで,共和国朴ヨンスン選手が優勝と報道。

25日 ▶エジプト・アラブと政府間1977～78年度文化交流計画書調印(於,カイロ)。

26日 ▶政府代表団(団長,鄭準基副総理)キューバへ出発(～12月12日帰国)。

27日 ▶共和国中央放送委とベトナム政府直属「ベトナムの声」放送局間に,ラジオ・テレビ放送分野での相互協力に関する協定調印(於,ハノイ)。

28日 ▶金主席,金日成総合大会を現地指導。

29日 ▶金主席,朝鮮大学校代表団を接見,金一,朴成哲,康良煜,金東奎,楊亨燮,黄長燁ら同席。

▶金主席参席下金日成総合大学30周年記念報告会開催(於,2.8文化会館),黄長燁総長記念報告。

30日 ▶最近第19回スカンジナビア国際卓球選手権大会で共和国朴ヨンスン選手も優勝と報道。

12月

1日 ▶労働党代表団(団長,金錫基教育委員長)アンゴラ解放人民同盟(MPLA)創立20周年行事参加のため出発。

▶朝鮮中央通信論評「日を追って露骨化する日本軍国主義者の朝鮮敵視策動」

2日 ▶ルーマニア工業展開催(於,朝鮮美術博物館,対外文化連絡委主催)。

3日 ▶金主席,在日朝鮮経済活動家代表団を接見。

▶政府貿易代表団(団長,韓秀吉貿易部副部長,ブルガリア,アルバニア,チエコスロバキア訪問に出发。

▶「労働新聞」社説「帝国主義的思想・文化的侵透を防ぐための闘争をひき続き力強く展開しよう」

4日 ▶朝鮮中央通信社創立30周年記念報告会開催(於、人民文化宮殿)、党中央委、政府の共同祝賀文を林春秋伝達、金成傑社長記念報告。

7日 ▶キューバ政府代表团(団長、アントニア・エスキベル・イエヌラ化学工業相)平壤着。

8日 ▶金主席夫妻、鄧穎超の中国全人大会常務委副委員長就任にさいし祝賀とあいさつを送る(玄峻極駐中大使伝達)。

9日 ▶李元寛に共和国労働英雄称号と国旗勲章第1級を授与する中央人民委政令公布(機械工業における功績による)。

10日 ▶第20回南北赤十字実務会議開催(於、板門店)——北代表①南朝鮮における人権じゅうりん行為の無条件中止と人間の基本権と民主主義的活動の保障、②対決・分裂政策の中止、③南朝鮮赤十字社の赤十字本来の姿勢への転換、を主張。

11日 ▶李鐘玉、柱応泰を政務院副総理に任命する政令公布。

12日 ▶労働党代表团(団長、金東奎副主席)ベトナム労働党第4回大会参加のため出発(～21日帰国)。

▶76年度社会主義国青少年親善国際柔道大会開幕(於、平壤、～15日)、10カ国、80余人参加。

13日 ▶日朝貿易業者代表团(団長、村上貞雄日朝貿易会常務理事)平壤着(～28日)。

▶キューバと政府間経済・科学技術協議委第5回会議議定書調印(於、平壤)。

14日 ▶セナル少年同盟結成50周年記念報告大会開催(於、2.8文化会館)、楊亨燮記念報告。

▶最近ブルガリアと1977年度商品流通・支払に関する議定書調印(於、プラハ)と報道。

15日 ▶タンザニア政府代表团(団長、アグード・ジュンベ第1副大統領)平壤着(～21日)。

▶チェコスロバキアと1977年度商品流通・支払に関する議定書調印(於、プラハ)。

16日 ▶朝鮮、タンザニア政府代表团間会談、康良煜、許淡ら参加。

▶日教組代表团(団長、岡本清副委員長)平壤着(～24日)。

17日 ▶金主席、タンザニア政府代表团を接見。康良煜、許淡ら同席。

▶康副主席に、インド新任大使(キチャケ・バラピル・ナラヤナ・メノン)信任状提出。

▶政府貿易代表团(団長、金錫基)中国へ出発。

18日 ▶金主席、ブレジネフ連共産党書記長に誕生70

周年にさいし国旗勲章第1級を授与する中央人民委政令を公布。

▶清川江火力発電所、第1段階工事を終了、発電開始と報道。

19日 ▶中国科学院と1977～78年度科学協力計画書調印(於、北京)。

▶金主席、リビア労総連盟代表团を接見。

▶ブルガリア科学院と1977～78年度科学協力に関する事業計画書調印(於、平壤)。

21日 ▶タンザニア政府代表团の訪朝に関する共同コミュニケーション発表。

▶金主席、日教組代表团を接見。

▶ルーマニア党・政府代表团(団長、ジョルジュ・オプレア副首相)平壤着(～23日)。

▶朝鮮、ルーマニア党・政府代表团間会談(～22日)、楊亨燮、鄭準基ら参加。

22日 ▶金主席、ルーマニア党・政府代表团を接見。

▶トーゴと航空運輸協定締結(於、ロメ)。

23日 ▶金主席、中国共産党活動家観善代表团を接見。

▶康副主席に、タイ初代大使(M. R. カセム・S. カセムスリ)信任状提出。

25日 ▶反日婦人会結成50周年記念中央報告会開催(於、2.8文化会館)、許貞淑記念報告。

▶中央人民委決定、鄭東詰を中央検察所所長より解任、後任に李鎮洙社会安全部長を任命。

▶中央人民委政令、崔元益を政務院社会安全部長に任命。

▶モンゴルと1977年度商品相互納入・支払に関する議定書調印(於、平壤)。

26日 ▶イエメン・アラブ政府代表团(団長、イブラヒム・モハメッド・アル・ハムディ軍事評議会議長)平壤着(～28日)。

▶金主席、イエメン・アラブ政府代表团を接見。

▶「労働新聞」論説「反日婦人会は最初のチュチェ型の共産主義婦人革命組織であった」

27日 ▶「労働新聞」論説「社会主義憲法を徹底的に具現して全社会のチュチェ思想化偉業を一層力強く促進しよう」——社会主義憲法節を記念。

28日 ▶日朝貿易業者代表团、共和国の債務支払延期交渉が成立したと発表(於、北京)。

29日 ▶赤十字中央委より在日朝鮮人中央教育会へ教育援助費・奨学金5億0092万8500円を送ったと報道(64回目、累計224億7573万8033円)。

31日 ▶「民主朝鮮」、長淵線の広軌化工事が完工したと報道、また6カ年計画の鋼鉄・セメント高地占領を報道。